



名古屋大学国際教育交流本部

国際言語センター

年 報

第 1 号



目 次

巻頭言

- ・「新しい革袋に新しい葡萄酒を」……………福田 真人 1

実践報告

- ・平成25年度公開講座「留学生に対する日本語パートナー講座」……………衣川 隆生 5
- ・さくらの会 10年の歩み……………勝 雄三 7

活動報告

- ・FD 活動の報告……………初山 洋介 11
- ・第68期（2013年4月期）日本語研修コース……………鹿島 央 13
- ・第69期（2014年10月期）日本語研修コース……………鹿島 央 16
- ・第32期 上級日本語特別コース（2012年10月～2013年9月）……………初山 洋介 18
- ・全学向日本語プログラム 2013年度……………李 澤熊 21
- ・学部留学生を対象とする言語文化科目「日本語」……………浮葉 正親 25
- ・短期留学生日本語プログラム 2013年度……………衣川 隆生 29
- ・第14期 日韓理工系学部予備教育コース……………村上 京子 31
- ・日本語教育メディア・システムの開発……………村上 京子・石崎 俊子・佐藤 弘毅 33
- ・G30国際プログラム（学部）における日本語科目……………初鹿野阿れ・徳弘 康代 36

- 資料…………… 39

巻頭言

「新しい革袋に新しい葡萄酒を」

国際言語センター長

福 田 眞 人

2013年10月をもって旧留学生センター(1993年創立)が改組され、ふたつの新しい組織が出来た。それが国際交流教育本部に属する国際国流教育センターと、国際言語センターである。当国際言語センターには、日本語・日本文化教育部門と英語教育部門がある。「日本語・日本文化教育部門」では、短期研修を含む本学受入れの全留学生を対象に、その資格とニーズに応じて各種日本語教育プログラムを設け、最先端の日本語・日本文化教育を行うとともに、日本語教育の教材開発も行っている。

さて新しい組織になったとは言うものの、旧留学生センターから基本的な職務が変わった訳ではない。年々増え続ける留学生諸氏に粛々と日本語を教えること、その彼らに研究の一端を示して将来のテーマに導く事に任務がある。グローバル化、国際化が叫ばれる今日この頃、ますますその数は増え続けるに違いない。現在世界70数カ国・地域から2,200人の留学生が名古屋大学に在学中である。これら留学生は、その経歴、現在のステータスのどの観点からも多様性に満ちており、学部生であるか院生であるか、国費か外国政府派遣か私費留学か、はたまたその宗教的背景などが異なる人々が共に暮らし、学ぶ事になる。

もちろん留学生相手の授業の中には、大概を日本語で行う通常のプログラムもあれば、他方グローバル30(G30)計画に沿って、すべて英語で授業が行われ、論文も英語で提出できるという新しいプログラム(2011年10月開始)も含まれる。後者は、英語主体で運営さ

れているが、その留学生達にもせっかくだから、日本語の教育も受けてもらいたいという強い希望が大学側にはあり、また留学生自身にも折角のチャンスだからやってみようという動機がある。

その日本語教育も、年を経て教育技術的な面での格段の進歩を遂げた事以外に、研究内容も充実した。言語学とその周辺のあらゆる分野が総動員されて、その国語学的研究から、対照言語学的研究、教育方法論、日本語CALL教材開発、音声学、音韻論、教育工学、教育心理学、文化人類学的側面まで、遺漏はない。

つまり、センター教員の職務は、単に留学生相手の日本語初級教育、G30の外国人日本語初級者を相手に日々奮闘しているだけではない。それに加えて、大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻における、諸国の大学から送り込まれてきた留学生を含む大学院生の教育、研究指導がある。(協力講座担当)

なお、英語教育部門は、G30との兼任教員で構成されているので、特にこの年報には記述がないことをお断りしておく。

新しい国際言語センターという革袋はできた。そこに、従来通りのワインを注ぐだけではなく、新しい何かの要素が求められよう。それは何か。その一つの答をこの新しい年報が示している事を期待し、また祈念して第一号を寿ごう。なにしろ第一回目は一回しかない。

年報に対して、また国際言語センターの活動に対して、諸兄のご叱正、ご鞭撻を賜りたい。

実践報告

平成25年度公開講座「留学生に対する日本語パートナー講座」

衣 川 隆 生

1. はじめに

法務省の「在留外国人統計」によれば、平成25年6月末現在、愛知県内にはおよそ20万人の外国籍住民が暮らしており、これらの外国籍住民の日本語学習支援を目的として愛知県内では数多くの日本語教室が活動を行っている。名古屋大学留学生とその家族の日本語学習支援を通じて相互の文化交流を図ることを目的として活動している「さくらの会」もその一つである。

「さくらの会」は、留学生センター教員が講師を担当した名古屋市生涯学習センター主催2003年度日本語ボランティア入門講座修了生を中心として2004年4月から活動を開始した日本語学習支援ボランティア組織であり、留学生センター（現在、国際言語センター）を中心として教室活動を行っている。

さくらの会の会員だけではなく、公的機関やNPOが主催する講座の受講を通して、日本語学習支援に興味を持ち、活動を始めたボランティアは数多く存在するであろう。しかしながら、昨今の社会情勢の影響もあり、一般市民を対象とした無料の講座や研修会は減少しつつある。

本講座は、このような社会情勢の下、「国際化」をキーワードに名古屋大学や地域社会の現状を概観し、そのような状況において求められる日本語学習支援のあり方を示すことで、一人でも多くの方に留学生の日本語学習支援に関心をもってもらいたいと考え、さくらの会と国際教育交流本部国際言語センターの共催で企画、開催したものである。

2. 講座の概要（別紙チラシ参照）

講座は月曜コースと水曜コースの2コースが開講され、各コースそれぞれ4回実施された。2コースの内容は同じである。日程、時間などは別紙のチラシを参照されたい。

- 第1回「名古屋大学の留学生の状況と地域の国際化」
- 1) 「留学生30万人計画」等の文部科学省が推進している留学生施策について
 - 2) 名古屋大学の国際化プラン、留学生数やその割合、出身地域などの現状について
 - 3) 留学生に求められる日本語とは
「生活者として求められる日本語」「キャンパス日本語」「学術日本語」
 - 4) 愛知県の外国人県民の現状・あいち多文化共生推進プラン・日本語教育推進のあり方について
 - 5) 豊田市の外国人市民の現状、多文化共生施策、日本語学習支援について

第2回「日本語学習の支援ってどんなこと？」

- 1) 日本語教育と日本語学習について
- 2) 狭義の日本語教育と広義の日本語教育について
- 3) 狭義の日本語教育の限界について
- 4) 学習のプロセスについて

第3回「対話と協働を中心とした学習支援の方法」

- 1) 対話と協働とは？
- 2) 新たな能力観、習得観について
- 3) 対話型の活動体験

第4回「具体的な活動を知らう」

さくらの会の会員による活動紹介と対話

3. 受講者の状況とアンケート結果

コミュニティセンターや鯉城学園におけるチラシ配布、新聞広告を利用して受講者の募集を行ったところ、月曜コースには16名（体調不良による受講辞退1名含む）、水曜コースには24名、計40名の申し込みがあった。このうち25名（月曜7名、水曜18名）が4回全てに出席し、8名（月曜5名、水曜3名）が3回出席であった。また、終了時には33名からアンケートを

回収することができた。出席率、アンケート回収率は、従来の講座と比較しても非常に高く、この結果からもこの講座が受講者の期待に沿ったものであることが推測できる。


講座は、受講者が考えたり実際に活動をやったりした結果を振り返り、解説を加えるという形で進めた。この方針についてはアンケートには「見知らぬ者同士が話し合うことで、お互いの距離が縮まるという効果もあった。これは日本語パートナー活動の場にも応用できると感じた」、「グループディスカッションやワークショップのような講座は、やってみることで気づきも多く、また他の受講者の方とのコミュニケーションの機会となりとてもよかった」とあるように、その効果が実感できるものであった。一方、内容については「具体的に見学すればもう少し理解できると思う。少

し理解できないこともあった」、「実際に1回でも外国人がいてくれればまた違う発見があったと思う」、「実際に日本語学習支援が始まってから感じた疑問点などに答えていただく講座もしてほしい」など、見学や実体験を含む内容を求める回答も多かった。

4. 今後に向けて

講座終了後、30名の方が「さくらの会」の教室活動を見学し、そのうちの10名の方が入会された。従来の講座よりも入会者が多かった一つの要因として、「さくらの会」が実際に活動している曜日、時間帯、場所で講座を開設したことが大きいと考えられる。今後は、アンケートにもあった「活動開始後のケア」も視野にいられた講座のあり方を検討していきたい。

—平成25年度公開講座—
さくらの会・名古屋大学国際教育交流本部国際言語センター共催

 **留学生に対する
日本語パートナー講座**

さくらの会は2004年より名古屋大学の留学生とその家族の日本語学習を支援しています。日本語パートナーとして、「教える」という言葉にとらわれず、テキストは使わないけれど学習者の知っている「ことば」から「対話」へと広げていく、『日本語ではなそう』を合言葉にボランティア活動をしています。

ボランティアとして何かをしたいと思っている方、
日本語パートナーについて学んでみませんか。

***講座内容と日程**

月曜コース

日程	内容
第1回 11月18日	名古屋大学の留学生の状況と地域の国際化
第2回 12月 2日	日本語学習の支援ってどんなこと?
第3回 12月 9日	対話と協働を中心とした学習支援の方法
第4回 12月16日	具体的な活動を知ろう


水曜コース

日程	内容
第1回 11月20日	名古屋大学の留学生の状況と地域の国際化
第2回 11月27日	日本語学習の支援ってどんなこと?
第3回 12月 4日	対話と協働を中心とした学習支援の方法
第4回 12月11日	具体的な活動を知ろう

時間 14時45分 ~ 16時15分
場所 名古屋大学留学生センター301教室
(地下鉄名城線「名古屋大学駅」1番出入口)

講師 名古屋大学国際教育交流本部国際言語センター
教授 衣川 隆生

—月曜コース・水曜コース共に同じです—



***定 員**
月曜コース・水曜コース共に20名
(応募多数の場合は、抽選の上決定します。)

***受 講 料**
無 料

***申込み方法**
下記の参加申込書にご記入の上、郵送・FAX・eメールにてお申し込み下さい。
eメールの場合は、参加申込書記入の内容をお知らせ下さい。

***締 切**
平成25年10月31日(木)
講座開始日の一週間前までに受講決定通知を郵送または送信いたします。
通知が届かないという場合は、お手数ですが下記までご連絡下さい。

***申込み・問合せ先(さくらの会)**
さくらの会代表 勝 雄三
住 所 〒464-0005 千種区千代が丘1-104-1101
TEL・FAX 052-772-9769
eメール nihongopartner_sakura@yahoo.co.jp
*お問合せには名古屋大学では対応しておりません。さくらの会までお願いします。
***** さ り と り *****

参加申込書

名 前 (ふりがな)
住 所 (郵便番号)
TEL
FAX
eメール
*個人情報につきましては、本講座の運営にあたって利用するものであり、それ以外に使用することはありません。

さくらの会 10年の歩み

さくらの会 代表

勝 雄 三

1. 沿革

「さくらの会」は、留学生センター教員の方々が講師を担当された名古屋市生涯学習センター主催2003年度日本語ボランティア入門講座修了生25名を中心として2004年3月29日に発足した日本語学習支援ボランティア組織である。会員の年会費により運営される独立したボランティア組織であり、名古屋大学留学生とその家族の日本語学習支援を通じて相互の文化交流を図ることを目的として2004年4月から活動を行っている。

2. 活動内容

1) 教室活動

全学向日本語プログラム開講中の月曜日・水曜日
午後2時30分～5時

教室活動は、留学生が授業で習った日本語を実際に使うところであるという考え方に立ち、参加している留学生のレベルに合わせた話し方、理解できる話し方で話すことを「さくらの会の葉」で求めている。この葉は留学生センターの日本語授業と「さくらの会」で

の活動との効果的な協力関係を考えてきた結果生まれたものであり、「さくらの会」の教室活動は運用の場、一方、文法や日本事情などの理解や説明は日本語授業の役割である、という役割分担がなされている。

2004年度から2013年度の10年間で、この教室活動には延べ4,556名の留学生と4,234名のボランティアが参加し、計554回の日本語学習支援を通じた交流を行った。

2) 研修会；自主研修会（にぎやか学習会）

全学向日本語プログラム開講中、月1回程度午前10：30～12：00の間、留学生への日本語支援活動の促進を目的として実施されている。2005年度～2013年度の9年間で71回の研修会が実施され、延べ1,011人のボランティアが参加した。

さらに、各年度の9月と3月の2回「さくらの会」独自のにぎやか学習会を実施している。9月は月曜日、水曜日の教室担当者が隔年で受け持ち、日本語支援活動に役立てられる内容で実施した。3月は学外に出て、著名な名古屋市内の施設を見学、研修した。その際は施設のボランティアの説明を受け多くの発見をし、学んだ。今後留学生にも同行案内出来る機会を持ちたく考えている。

3) 合同ミーティング；総会

月曜日、水曜日と教室活動開催の日程が異なる為、会員同士のコミュニケーション不足を補い、さらに「さくらの会」全体に対する問題提起、確認、決定等の合同認識が持てるように月一回の研修会の直前30分間を合同ミーティングとして実施した。

毎年、年度初めの4月、全学向日本語プログラム開講日に合わせ総会を開催している。

4) ビジターセッション等日本語授業への参加

ビジターセッション、トーキングタイム、インタビューセッションに参加した。

いずれも日本語教育プログラム担当者からの依頼に基づいて行われるものである。

教室活動への学生とボランティアの参加者数及び活動回数

年度	学生 (人)	ボランティア (人)	活動回数 (回)
2004	499	475	57
2005	341	357	55
2006	529	407	63
2007	483	402	56
2008	486	339	53
2009	462	350	54
2010	408	486	54
2011	470	485	55
2012	468	535	56
2013	410	398	51
計	4,556	4,234	554

日本語の授業にビジターとして入り、留学生からのインタビューに答えたり、ロールプレイを行うなどのコミュニケーション活動を行う。2005年度から2013年度の9年間に261回のセッションが企画され、述べ909人のボランティアが参加した。

5) ホームビジット

日本文化の理解及び相互理解の推進を図ることを目的として、日本人家庭への宿泊を伴わない訪問として2005年度、2006年度に各1回ずつ実施した。

2005年度は学生13名、ボランティア6名。2006年度は学生6名、ボランティア6名で実施した。

6) 東海日本語ネットワーク (TNN)、愛知県国際交流協会 (AIA) への入会。

「さくらの会」会員の外部での研修の場として、また情報収集の場として他の教室の日本語ボランティアの考え方、取り組み方等等、その方達とのコミュニケーションを図る場と位置付け入会した。

7) ニュースレター

「さくらだより」発行

発行回数は不定期 (年3~4回)

8) イベント (海外大学との国際交流) など。

- ①アメリカインディアナ州パーデュー大学日本語20の学生とのEメールでの交流活動。
- ②アメリカミシガン州カルビン大学との日本語受講学生とEメールでの交流活動。
- ③上記カルビン大学生等8名が2013年6月3日に来名。

全員「さくらの会」会員宅にホームステイされ、名古屋大学での交流も有った。

9) 日本語パートナー講座の実施

2013年11月から12月にかけて当講座が開催され、結果「さくらの会」に月曜日5名、水曜日5名の計10名が新規入会した。

10) 最後に

「さくらの会」設立より10年経過致し、振り返りますと、会の立ち上げ及びその後の運営に当たりこの名古屋大学で一方ならぬご指導を戴きました留学生センターの先生方、又日頃のボランティア活動を心温かく見守りビジターセッション等で適切にご指導下された講師の先生方、又留学生センターの事務所の方々等、皆様のご指導ご協力があればこそこの賜物と会員一同心より感謝申し上げます。

又、一方、会の活動を支えて下さった会員の方々、そしてそれぞれの年にお会い出来た留学生の方々等々、思い出が「走馬灯」のように浮かんで参ります。このような一つの大きな「えにし」で結ばれていたからこそ、「さくらの会」も現在まで活動出来たと思います。この「えにし」を今後さらに5年、10年と長く続けていく事が出来ます様に会員一同努力してまいります。皆々様の今迄のご指導とご協力に心より感謝申し上げますと共に、今後、より一層のご指導をお願い申し上げます。

活動報告

FD 活動の報告

第68期 (2013年4月期) 日本語研修コース

第69期 (2014年10月期) 日本語研修コース

第32期 上級日本語特別コース (2012年10月～2013年9月)

全学向日本語プログラム 2013年度

学部留学生を対象とする言語文化科目「日本語」

短期留学生日本語プログラム 2013年度

第14期 日韓理工系学部予備教育コース

日本語教育メディア・システムの開発

G30国際プログラム (学部) における日本語科目

FD 活動の報告

初 山 洋 介

日本語日本文化教育部門では、平成14年にFD班を設け、以後、現在に至るまで、日本語・入門講義の授業を担当する教員全員でFD活動に取り組んできた。さらに、平成16年には、留学生センターの委員会としてFD委員会を設置し、教員個々の教授能力の向上、授業の改善を目指している。

さて、今年度は、平成22年度に策定した下記の「平成23年度から27年度までのFD活動計画」に従い、FD活動を実施した。なお、平成25年度に、改組があり、「国際言語センター」となったが、FD活動についてはこれに伴う変更はなく、計画通り行った。

平成23年度から27年度まで（5年間）のFD活動計画

毎年度、教育（特に授業）を改善するための「研修会」を開催する。

研修会の回数：各年度、2～4回程度。

研修会の形式など

講演者・発題者があるテーマについて話し、その後、質疑応答・ディスカッション。

火曜日の全体会の時間帯を当てる（1時間程度）。

講演者・発題者は、話の内容を、A4、1～2枚程度にまとめ、記録として残す。

今年度実施した「FD研修会」の内容は下記の通りである。この研修会（2回）には、国際言語センターの専任教員および非常勤講師の大半が出席し、講演の後、活発な質疑応答・議論が行われた。

1) 第1回FD研修会

日時：2013年12月24日（火）、午後2～3時

場所：国際言語センター207W号室

講師：石崎俊子名古屋大学准教授

題目：コンピュータを授業に取り入れてみませんか

内容：

名古屋大学の日本語のクラスではデジタル化された音声をコンピュータもしくはiPadを利用して再生し

たり、先生方が作成されたオリジナルのパワーポイント教材が使われるなどコンピュータが授業に取り入れられる機会が増えている。今回のFDでは、もう一歩進んだコンピュータの活用方法を紹介した。

①日本語の授業で利用できるお勧めのサイト

インターネット上には初級から上級まで多数の日本語教育のオンライン教材が存在しているが、いざ授業で使うとなるとニーズにあった質の良い教材を見つけることは困難である。数年前にインターネット上のオンライン日本語教材の中から使いやすく優れた教材を選び技能とレベル別に分けて「オンライン日本語教育ポータルサイト」(<http://jems.ecis.nagoya-u.ac.jp/>)を作成した。今回はその中から特にお勧めのサイトを紹介し、効果的な使用例を紹介した。

②パワーポイントでアニメーションを利用する

パワーポイント特有のアニメーションの機能を利用し、紙や黒板ベースでは不可能なテキストや図の動的表示の方法を紹介した。

③パワーポイントでフラッシュカードを作成する

日頃から要望の多かったデジタル化された絵教材をパワーポイントでランダムに表示する方法を説明した。

2) 第2回FD研修会

日時：2014年1月28日（火）、午後3～4時

場所：国際言語センター207W号室

講師：鹿島央名古屋大学教授

題目：音声教育を支える音声学の知見

内容：

音声教育の目標、目的を述べた上で、リズム、アクセントおよびイントネーション（アクセント句と文末音調）の三つを音声教育の重要な柱と位置付け、それぞれの背景にある音声学的な研究動向についてまず説明を行った。特にリズムについては、リズム研究の経緯、CVCVというリズムユニットの問題点および呼

気の継続時間と総流量による生理的な観点からの研究結果に言及した。その後で、日本語学習者の不自然な発話を例として聴き、上記3点での特徴を把握した上で、AD図（アクセントダイアグラム）による発音調

整後の発話を聴いて、どこがどのように修正できたかを示した。最後にまとめとして、初級学習者を対象とした音声項目の導入、練習方法の手順と中・上級学習者への音声上の対応の可能性について述べた。

第68期（2013年4月期）日本語研修コース

鹿 島 央

2013年度4月期の大使館推薦の研究留学生は20名（文系部局13名，理系部局7名）で，全員名古屋大学へ進学する留学生であった。文系部局では，国際開発研究科が9名と最も多く，続いて経済学研究科2名，その他，法，教育が各1名であった。理系部局では，工学研究科5名，理学と環境学がそれぞれ1名であった。今期は20名のうち，7名が初中級レベル以上の既習者であった。

1. 研修生

A. 大使館推薦（研究留学生）

文部科学省より配置された大使館推薦の国費研究留学生は，18ヶ国20名（カンボジア，フィリピン各2名，イタリア，ウガンダ，ウズベキスタン，エクアドル，エストニア，スリランカ，セネガル，タイ，ナイジェリア，ブータン，ブラジル，ベナン，モロッコ，モンゴル，ミャンマー，ラオス各1名）であった。今回，20名のうち7名が全学向けの日本語講座を受講した。全学日本語コースでの内訳は，IJ112（全学集中日本語初級後半）2名，IJ212（全学集中日本語中級後半）2名，SJ300（全学標準日本語中上級）1名，SJ301（全学標準日本語上級）2名であった。

以上のように，第68期は研究留学生20名のうち13名が日本語研修コース，残り7名は全学向け日本語講座を受講した。

2. クラス編成

授業は，昨年度と同じく2クラス編成とし，専任教員2名，非常勤講師7名の計9名が担当した。

3. 時間割と日程

授業はこれまでのように月曜日から金曜日まで，午

前8時45分から午後2時30分まで90分授業を3コマ行った。

コースの日程は以下の通りである。

4月10日（水）開講式，4月11日（木）授業開始，夏季休業7月24日（水）～8月30日（金），9月2日（月）授業再開，9月10日（火）修了式

開講式の前に行う到着時のオリエンテーションは，4月6日（金）に行った。プリアリエンテーションでは，名古屋大学全体の日本語教育および日本語研修コースの概要を説明した後，既習者へのプレースメントテストおよびインタビュー，学習背景アンケートを行った。

4. カリキュラム

カリキュラムは，これまでと同じように(1)主教材 *A Course in Modern Japanese [Revised Edition], Vols. 1 & 2*（名古屋大学日本語教育研究グループ編）を中心とする授業，(2)その他の活動（テーマにそって一人ずつ話す：楽しかったこと，趣味，国の観光地，国との習慣の違い）(3)専門について話す，の3つで構成した。

進度は，これまでのように夏休み前に主教材が終了するカリキュラムとし，最終テスト，話すテストを行った。筆記テストのチェックは夏休み前に行った。

以下，概要と修了アンケート（全員から回収）の結果について報告する。

(a) 教科書を中心とする授業（1～14週）

教科書については，学習項目が多いということはあがるが，分かりやすい教材であるという評価が多かった。学習の仕方については，授業開始後すぐに行うSTUDY GUIDANCEで学生には説明をしているが，これまで自分のとってきた学習方法との違いなどがあり，すぐには定着するところまではいかないようである。

・ Drill

Notes on grammar を読んで Drill を予習して行くことになっているが、学生によってはあまり実行されていないこともあり、そのため授業内での教師の文法説明が分からないことがあった。特に11課から15課での進度の速さに不満のある学生もいたが、70%はおおむね「とてもよかった」と回答している。

・ Dialogue

修了アンケートでは、Dialogue が話す技術の習得あるいは日常生活に役立つというコメントがあった一方で、覚えるだけでなく自由に会話をつくりたいというコメントもあった。

・ Discourse Practice & Activity

Discourse Practice は、各課の Dialogue に基づく実際の場面を想定したロールプレイなどで、授業を休む許可をもらう練習、指導教員とのアポイントあるいは友達との約束を電話で断る練習などである。クラスの外で役立った、いろいろな状況設定のもとでもっと練習が必要とのコメントがあった。

・ Aural Comprehension

各課の Aural Comprehension は、宿題として提出することになっている。むずかしいが challenging というコメントが多かった。

・ Reading Comprehension

いろいろなトピックがあったので、新しい言葉を学ぶのに役立ったというコメントがあった。

・ WebCMJ

コンピュータを使った WebCMJ での練習は、10課までを復習として Drill が終わった後に、スケジュールに組み込んだ。11課からは自習としたが、自分で練習する学生は少なかつたため、テスト前に復習として一度スケジュールに入れた。

・ ひらがな

ひらがなを読むことがすぐ必要となるため、ひらがなテストを実施し、90%以上の得点を取ることを必須とした。3人ほど追試をしたが、その後は問題がなかった。

・ 漢字および漢字セミナー

300字の導入と練習。覚えるのが難しいというコメントが多かったが、教え方には85%ほどが満足しているとの回答であった。『KANJI&KANJI』を貸し出しているが、今期は50%ぐらいの使用率であった。

・ Dictation

先期と同じように5課まではこれまでの方法とし、6課からは文レベルとした。

(b) その他の活動

・ 話す練習

話すテーマはこれまでと同じで（「楽しかったこと」「趣味について」「国の観光地」「国との違いについて」）それぞれについてワープロで原稿を書き、話す活動として口頭発表を行った。90%以上が満足したという回答で、他の学生と情報が共有できたこと、語彙をふやせた、レビューできたなどのコメントがあった。

日本人ゲストにインタビューする活動も例年通り2度行った。今期は積極的に取り組んだようで、もっと機会を増やしてほしい、実際に話す経験ができた、習ったことを確認できたなどの回答があった。

Talking Time は、話すことに自信がついたというコメントがあった一方で、語彙が限られているのであまり話せなかったという回答もあった。全般的には90%以上が満足しているものの、さらに資料が必要なことが分かった。

・ 文化の紹介

「日本の歌と盆踊り」「年中行事」について、ビデオをみながら紹介した。

(c) 「専門について話す」(第15週)

このプログラムは各留学生それぞれが持ち時間8分(質疑応答も含む)で専門領域について発表するものである。85%が役に立つプログラムであると評価する一方で、日本語では難しいとするコメントもあった。このコースの中で、専門について日本語で読む授業が必要かという質問については、60%が必要であると回答しているが、専門は英語でいい、早すぎる、時間がかかるというコメントもあった。

5. アンケート結果

13名のうち、全員から回収した。

(1) コースの満足度

4段階で評価してもらった。「3:とても満足」から「0:まったく満足しない」で、13名中12名が「3」,

「2」の評価が1名であった。

(2) 自身の学習成果への満足度

4段階の評価で、「3：とても満足」から「0：まったく満足しない」。13名中6名が「3」、5名が「2」、2名が「1」の評価であった。例年のように入試を控えている学生にとっては、集中コースは大変であるが、今期もまじめに取り組んだ印象が強い。全体的には、期待していたほどできるようにはならなかったと回答した学生が1名いたが、12名については、期待以上の成果があったと回答している。

(3) アンケート項目

① 前回のアンケートから「この6カ月間、どのようにしてモチベーションをたもつことができましたか」という項目を入れた。以下のようないくつかの回答である。

- ・よい機会、学ぶことが幸せに感じた
- ・ことばをしらないと生活できないから
- ・クラス環境がよかった
- ・研究室の学生のおかげ

・日本人との交流

・歌とアニメ

② 「このコースを次の学生にも勧めますか」という質問には、全員が「はい」としている。理由は、「自信がもてるようになるから」ということであるが、「intensiveであることを認識してコースに参加すること」の必要性についてもコメントがあった。

6. まとめと問題点

今期は特にコース運営上の問題はなく、非常にまじめに学習に取り組んだと感じている。ただ、健康管理の問題については、来日当初から気候に慣れるのが大変であると言っていた学生や検査、治療の必要な学生もいて、日本語の大変さの上に、よく頑張ったことが印象的である。また、今期は国際開発研究科の留学生が多かったにもかかわらず、欠席もほとんどなかった。このことは、ひとえに指導教員の先生方のご指導と日本語教育へのご理解の賜物であると感謝している。学生一人一人の状況に応じたきめの細かい対応を今後も心がけたいと考えている。

第69期（2014年10月期）日本語研修コース

鹿 島 央

1. 研修生

A. 大使館推薦（研究留学生，教員研修生）

文部科学省より配置された大使館推薦の国費留学生は、11ヶ国19名（韓国8名，ガーナ2名，アメリカ，インドネシア，エジプト，チリ，中国，ブラジル，マレーシア，南スーダン，メキシコ各1名）で，うち7名は日韓理工系学部予備教育生である。残り12名のうち，9名が教員研修生で，残りの3名が研究留学生であった。進学先は名古屋大学3名，愛知教育大学7名，滋賀大学2名であった。今回の研修生の12名（日韓理工系学部生を除く）の内，5名は中級以上の学習者であったため，全学日本語講座（IJ112，IJ211，IJ212（2名），SJ301）を受講した。

B. 学内公募（国費留学生）

今期も法学研究科から日本国際協力センター（JICE）の無償支援留学生5名，国費英語コース留学生2名，合計7名を受け入れた。事前にオリエンテーションを行い，日本語研修コースか全学日本語コースか，学生自身に選択してもらった。

以上のように，第69期日本語研修コースは国費大使館推薦留学生7名，学内推薦留学生7名の合計14名でスタートしたが，11月になってマレーシアの留学生が家庭の事情で帰国せざるをえない状況となり，以降は13名で授業を行った。

2. クラス編成

授業は，2クラス編成とし，専任教員2名，非常勤講師7名の計9名が担当した。

3. 時間割と日程

時間割は68期と同様である。

コースの日程は以下の通りである。

10月8日（火）開講式，10月9日（水）授業開始，冬季休業12月23日（月）～1月3日（金），1月6日（月）授業再開。2月3日（月）授業終了。3月3日（月）修了式。2月21日（金）には例年のように愛知教育大学での交流会に留学生5名（2名欠席）と参加した。春季休業中の集中日本語講座については，国際言語文化研究科の主催する日本語実習クラス（2月20日から10日間）があり，研修コースからも参加した。

4. カリキュラム

今期の授業内容は，教科書を用いた授業は68期と同じであったが，Drillのレビューの時間を多少増やすなど，やや進度を遅くした。例年最終週に行っていた「専門について発表する」というプログラムは行わなかった。以下，修了アンケートの結果とともに授業内容を報告する。

(a) 教科書を中心とする授業（1～14週）

教科書の内容については，本国で使用している教科書と比較している学生もおり，全員の評価が高かった。

・ Drill

文法の説明は事前に学習してくるようになってきているが，量的に多く時間が不十分であったとのコメントがあり，そのために十分理解できていない学生があった。

・ Dialogue

修了アンケートでは，話す技能に役立ったというコメントの一方で，速すぎてわからない，時間が足りないという回答もあった。

・ Discourse Practice & Activity

実際に使うことができた，とてもよい練習であるとのコメントが多かった。

・ Aural Comprehension

自分の聴く力がどの程度か分かった，速すぎる，聞き取りにくく発音があったとのコメントがあった。

- ・ Reading Comprehension
教師の教え方についてのコメントがあった。
- ・ WebCMJ
例年のように11課からは自習としたが、ほとんどの学生が寮で使い、復習に役立ったと回答している。
- ・ 漢字および漢字セミナー
300字の導入と練習。教え方については、50%は満足しているという回答であったが、もっと用例がほしいというコメントもあった。『KANJI&KANJI』を貸し出しているが、ほとんど使用されていないことが分かった。

(b) その他の活動

- ・ 話す練習
話すテーマは前期と同じで(「楽しかったこと」「趣味について」「国の観光地」「国との違いについて」)、日本語を話すことが怖くなくなった、他の国の人と情報が共有できたこと、もっとたくさんの機会が必要とのコメントがあった。
日本人ゲスト(各回4名)にインタビューする活動も例年通り2度行った。
回数を増やしてほしい、話すことが上達したという回答の一方で、日本語力を高めることには役立たなかったというコメントもあった。
- ・ 文化の紹介
日本の遊び(お正月)と年中行事について紹介した。

5. アンケート結果

今期は7名の回答(54%)であった。

- (1) コースのプログラムの満足度
4段階で評価してもらった。「3:とても満足」から「0:まったく満足しない」で、6名が「3」の評価、1名が「0」の評価であった。
- (2) 自身の学習成果への満足度
4段階の評価で、「3:とても満足」から「0:まっ

たく満足しない」。3名が「3」、2名が「2」、1名が「1」の評価であった。1名は記述なしであった。このうち、5名は、日本語が、コース開始時に期待していたよりできるようになったか期待していたのと同じレベルであったと回答し、1名のみ期待していたほどできるようにならなかったと回答している。

(3) 「モチベーションをどのように保ったか」という質問には、必要だから、先生の情熱、日本での生活の中でもっと知識を得たい、国に戻って日本語を教えたいなどの回答があった。

(4) この日本語研修コースを次に来る学生にも勧めるかどうかという質問については、このコースのあとで研究に進める、学生に時間の余裕があれば勧めるとの回答があった。

6. まとめと問題点

今期も研究留学生在が少なく、教員研修留学生在が多かったが、特に日本語研修コースには研究留学生在は0であった。教員研修生の中で、習得が進まない学生がいたが、最後まで挫折することなく学習を続けることができた。多くの仲間の励ましと授業内での雰囲気によかったことが関係していると思われる。進学後の成長に期待したい。

後期は、法学研究科の留學生を受け入れているが、昨年度は特に問題もなく、学習に打ち込むことができた。しかしながら、今期は、法学研究科のゼミやクラスに出席したり、指導教員に会う必要があったりで、欠席する学生が目立った。これは、法学研究科のプログラムが、これまで2年半であった課程が、2年に変更されたという事情が関係していると思われる。次期の受け入れについては、先方の留學生担当教員とも十分な打ち合わせをし、学生にとって無理のないプログラムが選択できるように体制を整えていきたいと考えている。

第32期 上級日本語特別コース (2012年10月～2013年9月)

初 山 洋 介

第32期上級日本語特別コースは、「上級レベルの日本語能力の習得（話す・聞く・読む・書くのすべてにわたって）」「日本に関する基礎的理解」「各自の専門分野の基礎的な研究方法の習得と実践」の3つを目標として行われた。

学習者は、11カ国、19名（インド：3名、インドネシア：3名、ウクライナ：2名、中国：2名、ブラジル：2名、ベトナム：2名、ウズベキスタン：1名、オーストリア：1名、韓国：1名、ハンガリー：1名、モンゴル：1名）であった。また、10名の教員が指導に当たった。

以下、主要なプログラムおよびアンケートの結果などについて概説する。

(1) 教科書による日本語学習 (10月～4月)

『現代日本語コース中級Ⅰ』『現代日本語コース中級Ⅱ』（名古屋大学日本語教育研究グループ編）、『現代日本語コース中級Ⅰ 聴解ワークシート』『現代日本語コース中級Ⅱ 聴解ワークシート』（名古屋大学日本語教育研究グループ編、名古屋大学出版会）を教科書として日本語学習を行った。補助教材として、「プリテスト（予習のチェック）」「プリテスト：補足（連語など）」「復習クイズ」「文法補足説明」を使用した。また、3課ごとにテスト（筆記テストおよび話すテスト）を実施した。話すテストについては、録音に基づき個別指導も行った。

(2) 応用会話 (10月～4月)

教科書の会話が大学などの限られた場におけるものであることから、社会における様々な場における会話力（表現力、運用能力）を高めることを狙いとして、「応用会話」を行った。教材として、各種のモデル会話などを作成し、使用した。

(3) 入門講義・特殊講義 (10月～7月)

日本に関する基礎知識を身に付けること、レポート

のための基礎知識および基本的な研究方法を習得することを狙いとして、10月～2月（前期）および4月～7月（後期）の期間、それぞれ5つの分野の入門講義を14回（各90分）行った。前期は、「日本文化論Ⅰ」「国際関係論Ⅰ」「日本語学Ⅰ」「言語学Ⅰ」「日本文学Ⅰ」であり、後期は、「日本文化論Ⅱ」「国際関係論Ⅱ」「日本語学Ⅱ」「言語学Ⅱ」「日本文学Ⅱ」であった。学生は、前期は5科目のうち2科目以上を選択、後期は5科目のうち1科目以上を選択することとした。なお、入門講義は全学留学生が受講できるものであり、大学院研究生、短期交換留学生などとともに受講した。

また、特殊講義（必修）として「音声学」（90分×7回）を行った。

(4) 作文（レポートのための基礎訓練）（1月～4月）

レポート作成に必須の基礎知識を体系的に身に付けることを狙いとして、「書き言葉と話し言葉の基本的な違い」「論文・レポートに役立ついろいろな表現」「文末表現の諸相」「図やグラフの説明の仕方」「引用の仕方」「要約の仕方」「論文で使われる言葉」などについて学習した。

(5) 発展読解 (10月～4月)

発展読解として、「精読」（教科書の読解教材に代わるもの）、「新聞読解」、「問題付き読解」（生教材に読解の手助けとなる問題を付したもの）、「本の読解」（エッセイ・小説など、教員が用意したものの中から、学習者が興味のあるものを選択）、「特別読解」（学習が、新聞などから自分で記事を見つけ、授業でも教師役をする）などを行った。

(6) スピーチ (10月～7月)

自国の紹介、自分がふだん考えていることをはじめとする様々なトピックについて、学生がスピーチを行った（1人、1回、10分程度、スピーチ後に質疑応答）。

(7) レポート（1月～7月）

学生各自がテーマを決め、教員の個別指導のもとでレポートを作成した。分量はA4、15～30枚程度である。なお、今期も、「論文」「随筆」「創作」「報告」という4つのカテゴリーの中から、学生が1つを選んで取り組むこととした。その内訳は、下記の通り、論文：14名、随筆：3名、創作：1名、報告：1名であった。研究成果は『2012～2013年度日本語・日本文化研修生レポート集』（465ページ）として発行した。また、中間発表会（5月、発表：20分／質疑応答：10分）、最終発表会（7月、発表：25分／質疑応答：5分）を実施した。レポートの題目は以下の通りである。

(1) 論文

1. アーネルト・ユリアン（オーストリア）「『女性語』——日本語の性差に関する一考察——」
2. アニシャニヤト（インド）「日本語とベンガル語における親族関係を表す対称詞の比較」
3. アブディラー・フィクリ（インドネシア）「スマートフォン——普及に伴う変化——」
4. カオ・トゥ・ハー（ベトナム）「ジブリの作品に描かれた日本——『もののけ姫』・『千と千尋の神隠し』・『火垂るの墓』・『となりのトトロ』・『コクリコ坂から』から理解した日本と日本人——」
5. 金珉珠（韓国）「日本と韓国の学校の怪談の比較」
6. ズオン・ティ・トゥイー・リン（ベトナム）「日本における米食の変化」
7. ステイブン（インドネシア）「人気のあるCMの作り方——好感度の高いCMとは何か——」
8. スルトノヴァ・ヒーローラ（ウズベキスタン）「PETボトルのリサイクル」
9. タウエル・サンドラ（ハンガリー）「日本の韓流とその社会的な影響」
10. チョウ シュウシ（中国）「メタファーで見た日本人の「時間観」」
11. ヌネス ダニエラ（ブラジル）「ブラジル人日本語学習者に対する「受け身」の指導法」
12. ハサビルアフィーフ（インドネシア）「理想のインドネシアの福祉社会に向けて：日本の年金（社会保障）制度を参考に」
13. ホアン・ウェイ（中国）「『三』に対しての捉え方——ことわざを中心に——」
14. レオンティエワ・オリガ（ウクライナ）「日本語の諸方言のイメージ形成」

(2) 随筆

1. スディップ シンハ（インド）「感動した7人の出会い」
2. バヤルバド ニャムフー（モンゴル）「仏教美術——モンゴルと日本の比較——」
3. マウリ・ラファエル（ブラジル）「佛教の概念と人間関係」

(3) 創作（小説）

1. リブシチ・ヴァレリア（ウクライナ）「^{ジャパン}外の日本」

(4) 報告

1. サルガム・タンダン（インド）「『浮雲』の文体——言文一致運動の進歩——」

(8) 総合演習（5月～7月）

日本事情・日本文化に対する理解を深めることと上級レベルの総合的な日本語力を養成することを狙いとして、総合演習を行った。教材は新聞・雑誌の記事やテレビ番組などを使用し、学生は多様な言語活動を行った。

テーマは「ことばで伝える、ことばで遊ぶ」「なごやお菓子とやきもの」「日本人とスポーツ：心技体の世界」の3つである。各テーマの実施期間は1～3週間である。

なお、「なごやお菓子とやきもの」では、6つのグループに分かれて、調査・インタビュー等を行い、リトルプレス／ジンを作成した。調査担当者、リトルプレス／ジンのタイトルは以下の通りである。

- (1) ダニ、ユリアン、ミンジュ「和菓子と洋菓子」
- (2) ラファエル、ステイブン、ニャムフー、レーラ「駄菓子」
- (3) ヒローラ、シュウシ、オリガ「ケーキと会いに行きませんか」
- (4) スディップ、ハサビル、フィクリ「おかしなせかい：お菓子・焼き物」
- (5) アニシャ、ウェイ「緑の夏」
- (6) リン、サンドラ、ハー「名古屋のお菓子」

(9) 漢字テスト・漢字コンクール（10月～7月）

漢字学習を計画的に進めることを狙いとして、「漢字テスト」（20回）を行った。また、漢字学習をさらに活性化することを狙いとして「漢字コンクール」（4

回)を実施した。

(10) その他

以上に加えて、独話練習、討論会(ディベート)、ことばのクラス(ゲームなどを通して日本語力を高めるプログラム)なども行った。さらに、本学の学部生向けに開講されている教養科目の1つである「留学生と日本:異文化を通じた日本理解」にも参加した。

(11) アンケート

2013年7月に、学習者に対して、コースの内容などに関するかなり詳細なアンケートを行った。以下、「全体としてコースの内容に満足していますか」という質問のみについて、アンケート結果を紹介する。

満足度	満足していない		満足している	
評価	0	1	2	3
回答者数	0人	2人	11人	3人

(12) 今後の課題など

まず、今期の上級日本語特別コースの受講者は19名であり、昨年度の5名と比べて大幅に増加した。「コースガイド」を全面的に改訂し、このコースの良さ・魅力が以前よりも伝わりやすいものとしたことが、その一因であると考えられる。

また、従来から希望の多かった日本文学に関する授業を、今期から入門講義の1科目として開講した。「日

本文学Ⅰ」「日本文学Ⅱ」(徳弘康代特任准教授担当)である。

今期の受講者の特徴として、学習意欲・学習態度・学習成果の差が大きかったことが挙げられる。1年間、地道に勉強に励み、成果を挙げた留学生が相当数いた一方で、そうとは言えない学生もいた。このような状況に対応することは容易なことではないが、少なくとも、学習に集中できない学生との話し合いの時間・機会をなお一層増やすことなどが必要であろう。また、基礎力が極めて不十分であるにもかかわらず、より高いレベルの学習を希望する者もいた。この種の学生は、授業には出席していても日本語力が向上しない学生でもある。今後、このような場合には、本人の現在の学力と到達目標をより明確にして、その差を埋めるには何をしなければならないかを理解するように促したい。

ここ数年、「総合演習」のテーマの1つとして、地域の産業・文化について取り上げている。今年度は、上記の通り「なごやのお菓子とやきもの」と題して、日本文化・日本事情についての多角的な学習、日本語を用いる多様な活動を行った。また、昨年度と同様、「リトルプレス/ジンの作成」を課題としたが、学習者の多くは大変熱心に取り組み、リトルプレス/ジンの出来栄も期待以上であった。また、このような「総合演習」を、コースのもっと早い時期からやりたかったと述べた学生も複数いた。来年度以降も、実施時期、テーマ、方法などをさらに検討・工夫して、この種の総合演習を継続していきたい。

全学向日本語プログラム 2013年度

李 澤 熊

全学向日本語プログラムは、名古屋大学に在籍する留学生(大学院生、研究生など)、客員研究員、外国人教師などを対象に、日常生活や大学での研究生生活に必要な日本語運用能力の養成を目指して開講されている。

2013年度は昨年度に引き続き、日本語プログラムを見直し、効率を図るとともに、全学留学生を対象とする全学向日本語講座の拡充計画を立案し、実施した。

1. 2013年度の概要

1) 2013年度は、前期・後期に「集中コース (IJ コース) と「標準コース (SJ コース)」を開講し、アラカルト授業として「オンライン日本語コース」「漢字コース」「入門講義」「ビジネス日本語コース」を開講した。留学生の多様なニーズに対応するために、入門講義に新たに「日本文学」という科目を設けた。集中コースは、短期交換留学生の受講が多いということもあり、週20時間4レベル6クラスを設けた。なお、集中コースはすべて午前の開講となった。

標準コースは、7レベル10クラスを設けた。初級Ⅰ、上級レベルについては受講者が多かったため、2クラス体制をとった。なお、「グローバル30コー

ス」に対応するために、標準コースの一部 (SJ101～SJ202) の開講時間帯を午前に変更した。

2) 例年と同様、初級Ⅱ以上を希望する受講者を対象にクラス分けテストを実施し、日本語能力レベルに応じたクラス編成をした。なお、今年度もクラス分けテストの会場を2つ設け、上級レベルを希望する者については、別途にテストを実施した。

3) 各クラスにおいて、出席および成績の管理を行い、授業終了時に出席率および成績から合格者を発表し、合格者は次期進級する際クラス分けテストを免除している。再履修者についても同様である。ただし、上級における再履修者は定員を超える申し込みがあった場合、受講を制限することになっている。

4) 全学向日本語プログラムは、基本的には単位取得をする授業ではないが、短期交換留学生に関しては、別途に単位認定基準を設け、単位認定を行った。全学向け日本語プログラムと NUPACE 日本語の成績処理方法を統一し、コース運営の効率化を図った。

5) 「学生の出入りが激しい」という問題点を解消するために、登録の時に指導教員による「受講承諾書」の提出を義務化した。

6) FD 活動の一環として学生によるコース評価をレベル・科目別に行った。

2. 期間と内容

1) 前期開講期間：2013年4月15日(月)～7月29日(月) 14週間

2) 後期開講期間：2013年10月14日(月)～2014年2月3日(月) 14週間

3) 開講クラスと内容：

コース 科目	レベル クラス数	目 標	教 材
標準コース (standard)	初級Ⅰ SJ101	日本語がほとんどわからない学生を対象に、日本語文法の初歩的な知識を与えると同時に日常生活に必要な話しことばの運用能力を育てる。(漢字100字、単語数800語)	<i>A Course in Modern Japanese, [Revised edition] Vol. 1 & CD</i>
	初級Ⅱ SJ102	初級Ⅰ修了程度のレベルの学生を対象に、さらに基礎日本語の知識を与えると同時に日常生活に必要な話しことばの運用能力を育てる。(漢字150字、単語数900語)	<i>A Course in Modern Japanese, [Revised edition] Vol. 2 & CD</i>

コース 科目	レベル クラス数	目 標	教 材
標準コース (standard)	初中級 SJ200	初級Ⅰ、Ⅱで学んだ文法事項の運用練習を行うとともに、中級レベルで必要となる漢字力、読解力を含め、日本語運用能力の基礎を固める。(漢字200字、単語数1000語)	国際言語センター開発教材
	中級Ⅰ SJ201	初中級修了程度のレベルの学生を対象に、日本語の文法を復習しつつ、4技能全般の運用能力を高める。(漢字300字、単語数1200語)	『現代日本語コース中級Ⅰ』
	中級Ⅱ SJ202	中級Ⅰ修了程度のレベルの学生を対象に、日本語の文法を復習しつつ、大学での勉学に必要な日本語能力の基礎を固める。(漢字400字、単語数2000語)	『現代日本語コース中級Ⅱ』
	中上級 SJ300	中級Ⅰ、Ⅱで学んだ学習項目を実際の場面で使えるよう運用練習を行い、上級レベルの日本語学習の基礎を固める。(漢字500字、単語数3000語)	・国際言語センター開発教材 ・『日本語上級読解』アルク
	上級 SJ301	中上級修了程度の学生を対象に、大学での研究や勉学に必要な口頭表現、文章表現の能力を養う。(漢字800字、単語数4000語)	国際言語センター開発教材
集中コース (intensive)	初級Ⅰ IJ111	日本語がほとんどわからない学生を対象に、日本語文法の初歩的な知識を与えると同時に日常生活に必要な話しことばの運用能力を育てる。(漢字150字、単語数800語)	<i>A Course in Modern Japanese, [Revised edition] Vols. 1, 2 & CD</i>
	初級Ⅱ IJ112	標準コース初級Ⅰ修了程度の学生を対象に、日本語文法の基礎を固め、日常生活だけでなく勉学に必要な基礎的日本語運用能力を養う。(漢字250字、単語数1000語)	<i>A Course in Modern Japanese, Vol. 2 & CD, 作成教材</i>
	中級Ⅰ IJ211	集中コース初級Ⅰまたは標準コース初級Ⅱ修了程度の学生を対象に、日本語の文法を復習しつつ、4技能全般の運用能力を高める。(漢字300字、単語数1200語)	『現代日本語コース中級Ⅰ』および国際言語センター作成教材
	中級Ⅱ IJ212	集中コース初級Ⅱまたは標準コース初中級修了程度の学生を対象に、4技能全般の運用能力を高め、研究に必要な日本語能力の基礎を固める。(漢字400字、単語数2000語)	『現代日本語コース中級Ⅰ・Ⅱ』
漢字コース (kanji)	漢字1000 KJ1000	漢字300字程度を学習した学生を対象に、日本語能力試験N3-N2程度の漢字1000字を目標に学習する。	『漢字マスター Vol. 3 2級漢字1000』
	漢字2000 KJ2000	漢字1000字程度を学習した学生を対象に、日本語能力試験N2の上からN1程度の漢字約2000字およびその語彙を学習する。	『日本語学習のためのよく使う順 漢字2100』
入門講義 (introductory)	次の専門分野を日本語でやさしく解説する講義形式の授業である。日本語運用能力を高めるとともに、日本理解を助ける科目である。標準コース中上級レベル以上の日本語能力が受講資格である。		
	国際関係論Ⅰ・Ⅱ IR200	Ⅰ：グローバリゼーションは開かれた社会・経済を推進し、商品、思想などが縦横無尽に世界を駆け抜ける。さらに、ネットワーク社会の出現は人権やアイデンティティー意識の高揚をもたらしている。しかしながら、グローバリゼーションの行く末を案ずる声も大きくなってきている。グローバリゼーションをめぐる賛否両論を紹介する。 Ⅱ：グローバリゼーションをキーワードとして、いくつかの認識方法を手がかりに、現代国際環境の変容を見る。	講読文献などは授業中に適宜指示する。
	日本文化論Ⅰ・Ⅱ JC200	Ⅰ：この講義では、日本の家族や学校をめぐる最近の問題を取りあげ、受講者の出身国の事例と比較しながら、日本の社会や文化の特徴を議論していく。取りあげるテーマは、夫婦別姓、国際結婚、いじめ、不登校、フリーターなど。 Ⅱ：日本の社会や文化の特徴をより深く理解するために、韓国を比較の対象として取りあげ、東アジアにおける「近代」(西洋文明との出会い)の意味を考える。	講読文献などは授業中に適宜指示する。
	言語学Ⅰ・Ⅱ GL200	Ⅰ：主に現代日本語を素材として、言語学の基礎を学ぶ。取り上げるテーマは、言語学の基本的な考え方、人間の言葉の一般的特徴、言葉の意味(意味論)、言葉と社会(社会言語学)、世界の言語と日本語(言語類型論)である。 Ⅱ：言語学の一分野である意味論(認知意味論を含む)について学ぶ。特に、現代日本語を素材として、類義表現・多義表現などの分析方法を身につけることを目指す。	講読文献などは授業中に適宜指示する。

コース 科目	レベル クラス数	目 標	教 材
入門講義 (introductory)	日本語学Ⅰ・Ⅱ JL200	Ⅰ：主に日本語教育で問題となる文法項目を取りあげ、整理・検討することによって、文法の基本的知識を身に付けることを目標とする。取りあげるテーマは品詞、ボイス、テンス、人称、活用等 Ⅱ：主に日本語教育で問題となる文法項目を取りあげ、整理・検討することによって、文法の基本的知識を身に付けることを目標とする。	講読文献などは授業中に適宜指示する。
	日本文学Ⅰ・Ⅱ NL200	Ⅰ：日本の詩歌について、万葉集(日本最古の和歌集)からJ-POPの歌詞まで、時代を追って鑑賞する。奈良時代から江戸時代までを概観する。 Ⅱ：日本の詩歌について、万葉集(日本最古の和歌集)からJ-POPの歌詞まで、時代を追って鑑賞する。明治時代から現代までを概観する。	講読文献などは授業中に適宜指示する。
オンライン・ 日本語コース	・中上級読解作文 OL300 ・オンライン漢字 OLkj	中級レベルを修了した学習者を対象に、400字～600字程度の文章の理解とその文章の要約や関連作文を課し、文章表現能力を養う。 初中上級レベルの学習を修了した学習者を対象とした漢字のクラスを開講している。毎週1回オフィスアワーを開設する。	Moodle版日本語教材
ビジネス日本 語 Business	ビジネス日本語 Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ, Ⅳ BJ400	将来、日本の企業に就職を希望する人はもちろん、日本人のビジネスコミュニケーションに対する理解を深めたい留学生を対象とし、日本のビジネス・マナー及びビジネスで用いられる日本語表現を身につける。	Ⅰ：『ビジネスのための日本語・初中級』 Ⅱ, Ⅲ, Ⅳ：『新装版 商談のための日本語・中級』

(入門講義科目の「Ⅰ」は秋学期に、「Ⅱ」は春学期に開講する。)

3. 受講生数

1) 標準コース

	前期			後期	
	登録者数	修了者数		登録者数	修了者数
初級Ⅰ(2クラス)	41	23	初級Ⅰ(3クラス)	58	50
初級Ⅱ	33	21	初級Ⅱ	14	8
初中級	31	17	初中級	24	15
中級Ⅰ	25	17	中級Ⅰ	29	19
中級Ⅱ	40	23	中級Ⅱ	28	17
中上級	38	26	中上級	37	26
上級	60	37	上級	55	38
漢字1000	35	17	漢字1000	32	23
漢字2000	38	34	漢字2000	23	18
国際関係論	35	18	国際関係論	34	27
日本文化論	41	36	日本文化論	63	50
言語学	35	20	言語学	38	28
日本語学	41	26	日本語学	46	30
日本文学	34	29	日本文学	42	32
ビジネス日本語Ⅱ	32	20	ビジネス日本語Ⅰ	42	23
ビジネス日本語Ⅳ	27	15	ビジネス日本語Ⅲ	31	15
計	586	379	計	596	419

2) 集中コース

	前期			後期	
	登録者数	修了者数		登録者数	修了者数
初級Ⅰ・Ⅱ(2クラス)	18	13	初級Ⅰ・Ⅱ(2クラス)	27	26
初級Ⅱ・初中級	17	14	初級Ⅱ・初中級	21	18
初中級・中級Ⅰ(2クラス)	19	15	初中級・中級Ⅰ(2クラス)	29	18
中級Ⅰ・Ⅱ	15	14	中級Ⅰ・Ⅱ	20	17
計	69	56	計	97	79

4. 学生によるコース評価

昨年度と同様に授業改善と教授能力の向上を図るために、前期と後期に受講者を対象に、コース内容に関するアンケートを実施した。回答者数（短期交換留学生を含む）は前期と後期、それぞれ116名と135名である。

アンケートの内容はレベルによって異なるが、各レベルに共通して尋ねた質問のうち3つの項目について報告する。

質問1：勉強したことがよく理解できたと思いますか。

質問2：授業内容は自分にとって役に立ったと思いますか。

前期

	Q1	Q2	合計
そう思う	50	67	51%
どちらかといえば「はい」	45	33	34%
どちらとも言えない	17	9	11%
どちらかといえば「いいえ」	4	6	4%
そう思わない	0	1	0%
回答者合計	116	116	100%

後期

	Q1	Q2	合計
そう思う	50	67	51%
どちらかといえば「はい」	45	33	34%
どちらとも言えない	17	9	11%
どちらかといえば「いいえ」	4	6	4%
そう思わない	0	1	0%
回答者合計	116	116	100%

以上の結果から分かるように、全般的に良好な評価結果が得られた。ただ、受講者によっては「科目によってはテストの回数が多すぎる」「上級クラスは学生のレ

ベル差が大きい」というような指摘もあった。今後、このようなニーズに対応していくために、さらに工夫が必要であろう。

質問3：日本語の授業について意見やアドバイスがあったら書いてください。

この質問には様々な回答があったが、全般的に寛大な評価が多かった。しかし、中には以下のような要望も出ており、今後さらなるプログラムの改善に努める必要があると感じた。

- ・「日本語で学術論文の書き方を知りたい」
- ・「上級レベルでも文法科目を設けてほしい」
- ・「中級レベルでも作文中心の科目を設けてほしい」

5. 今後の課題

以上のように、2013年度は昨年度の実施結果を踏まえ、留学生の多様なニーズに対応するために、新規科目を開講し、改訂版の教科書（中級レベル）で授業を実施するなど、さらにコースの改善を図ってきた。

しかし、留学生30万人計画が進む中、今後日本語教育へのニーズはさらに多様化するものと予想されるため、さらなる体制の整備が必要であると考えられる。

そこで来年度は、既存の日本語プログラムを見直し、さらに効率を図る予定である。

まず、改善策の一つとして、受講登録の改善である。年々受講者数が増えると見込まれており、開講前の段階から受講者の情報をきちんと把握する必要がある。

また、よりスムーズなコース運営のために、受講者の名簿（記載内容・形式）についても改善を図りたいと考えている。

学部留学生を対象とする言語文化科目「日本語」

浮 葉 正 親

学部 に 在 籍 す る 留 学 生 が 大 学 で 所 定 の 単 位 を 取 得 し て い く た め に は、講 義 を 聴 く、ノ ー ト を と る、ゼ ミ で 発 表 す る、レ ポ ー ト ・ 答 案 を 書 く、デ ィ ス カ ッ シ ョ ン を す る な ど、高 度 な 日 本 語 運 用 能 力 が 要 求 さ れ る。授 業 で は そ の た め の 訓 練 を 行 う と と も に、日 本 人 学 生 や 教 員 と の コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 能 力 の 育 成 や 日 本 社 会 ・ 文 化 に 対 す る 理 解 を 深 め る こ と を 目 的 と し て い る。

2013年言語文化科目「日本語」の科目および受講者数は以下の通りであった。

期	対象	内容	時間	担当者	受講者数
1期（1年前期）	文系	文章表現	月3限	國澤里美	12
		口頭表現	木3限	西田瑞生	12
	理系	文章表現	火2限	村上京子	7
		口頭表現	木2限	西田瑞生	6
	工学（国）	口頭表現	月2限	國澤里美	8
		文章表現	水2限	魚住友子	8
	工学（私）	文章表現	月2限	村上京子	12
		口頭表現	水2限	鷺見幸美	12
2期（1年後期）	文系	文章表現	金2限	國澤里美	11
		口頭表現	木3限	村上京子	12
	理系	文章表現	火2限	村上京子	6
		口頭表現	木2限	西田瑞生	6
	工学（国）	口頭表現	月2限	西田瑞生	9
		文章表現	水1限	魚住友子	8
	工学（私）	文章表現	月2限	國澤里美	11
		口頭表現	水1限	鷺見幸美	12
3期（2年前期）	文系	文章表現	火1限	浮葉正親	16
4期（2年後期）	文系	文章表現	木1限	浮葉正親	16

クラス

文系：文学部・教育学部・法学部・経済学部・情報文化学部社会システム情報科

理系：医学部・理学部・農学部・情報文化学部自然情報学科

工学（国）：工学部（国費留学生・政府派遣留学生）

工学（私）：工学部（私費留学生・日韓理工系留学生）

授業内容

1年前期

文系・文章表現

レポートを作成するために、文体・アカデミックワードなどの文章表現、引用・要約の仕方を学習した。実際に学習者がアウトラインを立て、それをグループで検討した上で、レジュメ・レポートを作成した。また、大学生活で必要な文章表現技術の向上を目指し

て、データ・資料の読解、説明文・意見文の作成を行った。さらに、依頼・提案・謝罪のメールの練習も取り入れた。

文系・口頭表現

大学生生活、とくに、学会やクラスでのプレゼンテーションにおいてスムーズで魅力的な口頭表現ができるようになるための練習をした。とくに、構造的なわかりやすさということに注目し、いくつかのトピックを

話す場合に、同じトピックのものをまとめて話すグループリング、トピックをまとめたものを最初に話すラベリング、どの順序で話すかというオーダリングを考えて話す練習をした。比較と対照の表現や助詞相当語なども学んだ。

理系・文章表現

実際の科学技術論文を読み、その中で使われる書式や表現を学習した。また、語彙・表現を増やす目的で学習者の関心のある書籍を多く読み、それに関するレジюмеやレポート作成を実際に行った。また、語彙・表現を増やすために多読を促し、推薦図書を多く貸出した。学習者は自習で読んだ新書や小説などを記録したり、自分で作成した多様な文章を綴じ込んだりして、非常に充実したポートフォリオを提出した。

理系・口頭表現

大学生活、とくに、学会やクラスでのプレゼンテーションにおいてスムーズな口頭表現ができるようになるための練習をした。とくに、構造的なわかりやすさということに注目し、いくつかのトピックを話す場合に、同じトピックのものをまとめて話すグループリング、トピックをまとめたものを最初に話すラベリング、どの順序で話すかというオーダリングを考えて話す練習をした。短く表現する方法や助詞相当語の使用法なども学んだ。

工学系（国費）・文章表現

読解能力と論理的文章作成の基礎力養成を目的に、日本の大学生・文化・社会や科学技術を扱った新聞等の読解、要約・意見・ポイントを整理して書く練習を行った。今年は、放射能問題、非正規雇用問題なども取り上げ、学力差対策に小発表も行った。その他、板書文字、文体、句読点、原稿用紙やメール・レジюмеの書き方の学習、期末発表を行った。

工学系（国費）・口頭表現

自分の意見を効果的に伝えるために、スピーチ、ディスカッション、プレゼンテーションの仕方を学習した。具体的には、学習者が関心のあるニュース・トピックについて、情報を整理し、伝達する活動を行った。また、それを踏まえてディスカッションも行った。プレゼンテーションの実践では、発表の表現・

質疑応答の仕方を学び、レジюме・スライドを作成した。

工学系（私費）・文章表現

大学生活で必要となる文章表現技術に関してピア・ラーニング活動を通して学習した。メールによる連絡・依頼文、簡単な機械の使い方マニュアルなどの説明文、資料を活用した意見文などを書く練習を行った。また、レポートを作成するために必要なアウトラインの立て方、引用・要約の仕方、レジюмеの作成など基本的な技能を段階的に学習した。学習者は授業に先立ちポートフォリオ作成の説明を受け、授業の中で意識的に自分の学習の仕方をモニターし、ポートフォリオを完成させ提出した。試験とポートフォリオによって評価された。

工学系（私費）・口頭表現

- ・スライドを活用したプレゼンテーションの実践を通して、発表及び質疑応答の仕方を学んだ。
- ・話せる話題を増やすこと、独話での談話展開の仕方に注意を促すことを目的に、3分間スピーチを行った（1週に1名）。
- ・you-tube, DVDを視聴し、ノートをとり、内容をまとめ、口頭で伝える練習をした。
- ・自律的学習能力の向上を目的とし、自己課題の設定及び自己評価を行った。

1年後期

文系・文章表現

学習者が自分自身の関心に沿ってテーマを決め、必要な資料を収集し、レジюме・レポートを作成するという活動を複数回行なった。一連の活動において、グループでの検討・修正を行ない、自己修正できるようになることを目指した。また、前期で学習した内容を踏まえ、より高度な引用・要約の練習、意見文の作成、図表の説明を行なった。

文系・口頭表現

ロールプレイ、ディスカッション、ディベート、提言スピーチを通して、自分の意見を論理的、効果的に伝える口頭表現練習を行った。ディベートは学習者が設定したさまざまなテーマに関しルールに従い議論した。各学習者3回ずつ登壇し、その日のうちにe-メー

ルを使って録画ファイルを送った。学習者はそれを見ながら振り返り、改善案を考え、ポートフォリオを完成した。口頭試験とポートフォリオによって評価した。

理系・文章表現

実際の科学技術論文を読み、その中で使われる書式や表現を学習した。また、語彙・表現を増やす目的で学習者の関心のある書籍を多く読み、それに関するレジュメやレポート作成を実際に行った。文章の要約や引用の仕方、図表の作り方やその説明など、レポート作成のための文章を書く練習をおこなった。また、語彙・表現を増やすために多読を勧め、学習者は自習で読んだ新書や小説などを記録したポートフォリオを最終回に提出した。

理系・口頭表現

前期に引き続き、談話をわかりやすくする構造的条件を考えながら、より魅力的に話す練習をした。プレゼンテーションソフトを使用し、スライドを見せながら話す練習、スライドなどを使用せずキーワードのみを提示して魅力を伝える練習をした。店舗と商品について、あるいは、映画について、ほかの人が興味をもつようなプレゼンテーションするということを通して、学生間でよいところを学びあった。

工学系（国費）・文章表現

さらに高度な文章表現能力の養成を目的に、図表の説明・引用・レポートの書き方を学び、レポートを2回作成・発表した。1回目はグループ作業で、資料丸写し防止と分析力養成のため、図表を元に分析して書いた。2回目は個人作業で、図表以外の文書資料も読んで書いた。どちらもテーマは自由とした。出身国により学習態度に差があった。

工学系（国費）・口頭表現

大学生活、とくに、学会やクラスでのプレゼンテーションにおいてスムーズで魅力的な口頭表現ができるようになるための練習をした。とくに、構造的なわかりやすさということに注目し、いくつかのトピックを話す場合に、同じトピックのものをまとめて話すグルーピング、トピックをまとめたものを最初に話すラベリング、どの順序で話すかというオーダリングを考

えて話す練習をした。比較と対照の表現や助詞相当語なども学んだ。

工学系（私費）・文章表現

大学生活で必要となる文章表現技術に関してピア・ラーニング活動を通して学習した。メールによる連絡・依頼文、簡単な機械の使い方マニュアルなどの説明文、資料を活用した意見文などを書く練習を行った。また、レポートを作成するために必要なアウトラインの立て方、引用・要約の仕方、レジュメの作成など基本的技能を段階的に学習した。試験とポートフォリオによって評価した。

工学系（私費）・口頭表現

- ・ディベートの実践を通して、討論の仕方を学んだ。（必要十分な資料の活用、論理的で一貫性のある内容の構成、聞き手を納得させる効果的なスピーチ、相手の内容を踏まえて自説を展開する効果的な討論）
- ・語彙力、基礎的口頭表現力と自律的学習能力の向上目的として、「読書活動」を行った。
- ・日本語・日本についての理解を深めることを目的として、川柳の鑑賞・作成を行った。

2年前期

文系・文章表現

日本社会・日本文化に関する文献等を読み理解を深めるとともに、レポートや卒業論文に必要な論理的な文章の書き方を学んだ。小学校での英語教育導入、大学生の就職活動をめぐる問題の中からテーマを選び、資料を読みながら、アウトラインと序文を作成した。

2年後期

文系・文章表現

前期で学んだ内容をふまえ、より高度な読解力、文章表現力の向上を目指した。要約と引用の方法を中心に学び、興味のある本の内容を紹介するレポートを作成した。ここ数年話題となった新書を十数冊準備し、選んでもらった。

授業アンケートの結果

例年のように、授業終了時に行われたアンケート結果では、ほぼ全項目において非常に高い評価を得た。主な項目を下に示す。(4点満点)

・この授業はシラバス等で説明された授業目標や評価

方法に沿って行われましたか (3.9)

・この授業に意欲的・自発的に取り組むことができましたか (3.5)

・この授業で設定された学習内容を理解できましたか (3.7)

・担当教員の熱意や工夫を感じましたか (3.7)

短期留学生日本語プログラム 2013年度

衣 川 隆 生

1. 2013年度の概要

短期留学生は日本語プログラムを受講することで単位取得が可能である。2013年度においては、1日1コマの「標準日本語コース (SJ コース)」7レベル、1日2コマの「集中日本語コース (IJ コース)」4レベル、「漢字コース」2科目、「入門講義」4科目に加え、新たに「ビジネス日本語」4科目、アカデミック日本語8科目において単位認定を行った。

このうち、標準日本語コースの初級レベル (SJ101, SJ102) と集中日本語コースの初級～初中級レベル (IJ111, IJ112) においては、総合的な日本語能力を身につけるために、週5日出席すること義務づけている。SJ101, SJ102は1日1コマ・週5コマ・全70コマのコースであり、これらのコースを修了した学生には5単位を認定している。また、IJ111, IJ112は1日2コマ・週10コマ・全140コマのコースであり、これらを修了した学生には10単位を認定している。

SJ200以上のレベル、及びIJ211以上のレベルの学生は、レベルやニーズに合わせて文法・談話、読解、聴解、会話、作文のクラスを技能別に登録することが可能である。学生は1科目から最大5科目まで履修登録することができる。また、技能習熟度に合わせて配置されたレベルよりも下のレベルのクラスを登録することも可能である。ただし、2レベルで同じ名称の科目を登録することは認めていない。またSJコースとIJコースの科目を両方取することはできない。SJコースに登録した学生はSJコースの科目のみ、IJコースに登録した学生はIJコースの科目のみ履修することができる。コース修了時、SJにおいては1科目1単位を、IJコースにおいては1科目2単位を認定している。

「漢字コース」は「漢字1000」「漢字2000」を開講しそれぞれ1単位を認定している。

以上の「標準日本語コース」、「集中日本語コース (IJコース)」、「漢字コース」の詳細に関しては全学向けプログラムの報告を参照いただきたい。

上記に加え、日本語能力試験 N2, または旧日本語能力試験 2旧合格者に対しては、春学期、秋学期それぞれ4科目開講している入門講義の受講も認め、1科目につき2単位を認定している。

また、2013年度からはグローバル30プログラムの学生を対象に開講されているビジネス日本語に加えてアカデミック日本語4科目も短期留学生が受講した場合、単位を認定する科目とした。

2. 2013年度の改善点

上述したように、2012年度からグローバル30プログラムの学生を対象に開講されているビジネス日本語を短期留学生が受講した場合の単位認定を開始したが、2013年度からはビジネス日本語に加えて新たにアカデミック日本語も単位認定科目として追加した。春学期には中級1以上の学生に対して「ビジネス日本語Ⅱ」、「アカデミック日本語 (聴解・発表) Ⅱ」、「アカデミック日本語 (読解・作文) Ⅱ」、中上級以上の学生に対して「ビジネス日本語Ⅳ」、「アカデミック日本語 (聴解・発表) Ⅳ」、「アカデミック日本語 (読解・作文) Ⅳ」の科目について単位認定を行い、秋学期には中級1以上の学生に対して「ビジネス日本語Ⅰ」、「アカデミック日本語 (聴解・発表) Ⅰ」、「アカデミック日本語 (読解・作文) Ⅰ」、中上級以上の学生に対して「ビジネス日本語Ⅲ」、「アカデミック日本語 (聴解・発表) Ⅲ」、「アカデミック日本語 (読解・作文) Ⅲ」の科目について単位認定を行った。グローバル30プログラムの開放科目は2012年度には通年でビジネス日本語3科目のみであったが、この追加により2013年度は12科目となった。

ただし、ビジネス日本語、アカデミック日本語に関しては、グローバル30の学生の優先受講を認めているため、短期留学性の受講制限を行う場合もある。

3. 登録・成績状況

表1は春学期と秋学期の標準日本語コース、表2は集中日本語コースの登録者数を示したものである。登録者数は春学期には短期留学生の88%に相当する103名中91名(異なり数)が、秋学期においては84%に相当する92名中77名(異なり数)が日本語を受講している。2012年度には、春学期には80%、秋学期においては86%の受講率であったが、2013年度はその割合は若干回復している。

一方、受講者の延べ人数でみると、標準日本語コースの受講生が春学期に268名、秋学期に175名となっている。2012年度の春学期212名、秋学期90名と比較すると増加が著しい。一方集中日本語コースの受講生は春学期に84名、秋学期に86名となっている。この数は2012年度の春学期107名、秋学期98名と比較すると減少傾向にある。これは、英語で履修できる専門科目の充実により、日本語科目以外で短期プログラム修了要件である単位数を登録できるようになったこと、また、週10コマの集中日本語コースを受講することがむずかしくなったことがその一つの要因として考えられる。

4. 今後の課題

短期留学生が2013年度に初めて100名を超え、日本語プログラムの受講者も異なり数で90名を超えるまでとなった。また、標準日本語コースでは延べ人数で受講者の増加が著しい。グローバル30プログラムの科目を単位認定科目として加えたことがその一因ではあるが、それ以外の科目は短期留学性の増加にも関わらず受講者数を増やすことはできていない。受講の効率化だけでなく、効果を引き出す最適人数を実現する対策を早急に検討する必要がある。

表1 標準日本語コースの登録者数

	春学期	秋学期
SJ101	6	9
SJ102	2	2
SJ200会話1&2	4	0
SJ200読解	4	0
SJ200聴解	3	0
SJ200文法・談話	4	0
SJ201会話1&2	2	2
SJ201読解	3	1
SJ201聴解	5	2
SJ201文法・談話	2	2
SJ202会話1&2	5	0
SJ202読解	5	0
SJ202聴解	5	1
SJ202文法・談話	6	2
SJ300会話1	13	12
SJ300会話2	14	8
SJ300読解	13	10
SJ300聴解	9	11
SJ300文法・談話	15	9
SJ301会話	12	7
SJ301読解	11	7
SJ301聴解	15	8
SJ301作文I	9	7
SJ301作文II	10	8
漢字1000	15	20
漢字2000	19	6
ビジネス1		8
ビジネス2	13	
ビジネス3		10
ビジネス4	7	
アカデミック(聴解・発表)1		4
アカデミック(聴解・発表)2	8	
アカデミック(聴解・発表)3		8
アカデミック(聴解・発表)4	9	
アカデミック(読解・作文)1		1
アカデミック(読解・作文)2	10	
アカデミック(読解・作文)3		10
アカデミック(読解・作文)4	10	
	268	175

表2 集中日本語コースの登録者数

	春学期	秋学期
IJ111	10	11
IJ112	4	14
IJ211会話1&2	6	8
IJ211読解	6	8
IJ211聴解	6	9
IJ211文法・談話	6	8
IJ212会話1	9	6
IJ212会話2	8	6
IJ212読解	10	6
IJ212聴解	9	5
IJ212文法・談話	10	5
	84	86

第14期 日韓理工系学部予備教育コース

村上京子

第14期日韓理工系学部予備教育コースは、平成25年10月8日から26年3月3日までの6か月（実質18週）間、7名の学生を対象に開講された。このコースは、工学部入学後の勉学や生活に支障のないよう、日本語運用および専門基礎能力を養成することを目的に行われる。日本語に関しては、日常生活に必要な会話練習のほか、科学読み物を読む、レポートを書く、講義形式のまとまりのある話を聴く等の練習を行う。また、教養科目「留学生と日本—異文化をとおしての日本理解—」や「日本事情」の授業を通じて日本文化に対する理解を深めることも目標とする。専門基礎教育に関しては、工学部スタッフを中心に物理・化学・数学に関して授業が行われた。

日程

10月8日(火) 開講式
留学生センター・オリエンテーション
10月9日(水) 日本語オリエンテーション
日本語診断試験
10月10日(木) 授業開始
11月27日(水) バス旅行
12月24日(火)～1月10日(金) 冬休み期間
2月3日(月) 工学部入試のため休講
2月26日(水) レポート発表会
2月27日(木) 修了試験
3月3日(月) 閉講式

科目別時間および担当者・内容

科目	コマ数	時間	担当	内容
日本語	14	420	留学生センター教員・非常勤講師6名	会話練習・聴解・文法・読解・作文
専門科目	3	108	工学部教員・非常勤講師3名	物理・化学・数学
日本事情	1	36	留学生センター教員・非常勤講師1名	ビデオ・新聞等を使った日本事情
教養科目	1	30	留学生センター教員	日本人学生との合同クラス

時間割

	1限	2限	3限	4限
	8:45-10:15	10:30-12:00	13:00-14:30	14:45-16:15
月	作文	教養科目	読解	漢字・語彙
担当	村上	留セ	二口	ミン
火	会話	聴解	専門科目 (化学)	応用会話
担当	賢珠	賢珠	ソン	近藤
水	会話	OL 語彙・ 読解	専門科目 (数学)	
担当	近藤	村上	伊藤	
木	文法	聴解	専門科目 (物理)	日本事情
担当	李	入江	富田	ミン
金	聴解	会話	OL 作文	OL 聴解
担当	入江	田中	村上	石崎

OL：オンライン・コースの略

基本テキスト

会話：「現代日本語コース中級Ⅰ，Ⅱ」
名古屋大学出版会 CD版
聴解：「現代日本語コース中級 Web 聴解Ⅰ，Ⅱ」
CD、Web版
読解：「大学・大学院 留学生の日本語 読解編」
アルク
作文：「留学生のための理論的な文章の書き方」
スリーエーネットワーク
漢字：「KANJI IN CONTEXT 中・上級学習者のための漢字と語彙」The Japan Times

本コース学生受け入れに先立ち、工学部・留学生センター・国際課（事務）の担当者によるワーキンググループを立ち上げ、協議を行った。時間割の調整、開講期間など取り決め、緊密に連絡を取りながらコースを進めていくことにした。

来日直後、恒例の診断テストを行った。その結果、例年とほぼ同様であったため、例年通りの目標設定でコース運営を行った。出席状況もよく、3課ごとの定期試験でもある程度の幅はあるものの全員規定レベルに達していた。修了試験でも前年度に比べ平均点が10ポイント以上高く、問題のある学習者は見られなかった。

例年と同様、各自が選んだテーマで資料を収集し、

レポートを作成した。レポート作成には全員積極的に取り組み、2月26日に工学部教員も招いて、その発表会を実施した。レポートのテーマは、「宇宙エレベーター」「リニヤモーターカー」「自動運転自動車」「電池の歴史—現在我々が使う小型バッテリーの登場まで—」「木組みとは何か」「ヒューマノイドの歩行のメカニズムについて」「フレキシブルディスプレイ」であった。各自の発表後、工学部教員や日本語担当教員、先輩学生などから多くの質問・意見が出され、各自真剣に答えていた。この経験は、学習者にとって今後の勉強に取り組む上での自信にもつながり、貴重な体験となったと考えられる。

日本語教育メディア・システムの開発

村上京子・石崎俊子・佐藤弘毅

日本語教育メディア・システム開発部門（JEMS）では、2013年度に以下の活動を行った。

1. オンライン読解問題、漢字問題、科学技術語彙問題の作成
2. オンライン日本語コースの運営

1. オンライン読解問題、漢字問題、科学技術語彙問題の作成

以下に述べる3種類の問題はmoodle上に作成され、学習者が自由にアクセスして自律学習ができるようになっている。各問題の解答送信後、即時に正誤判定と正答がフィードバックされる。PCのほか、iPadなど

タブレット端末やスマートフォンでも学習できるようになっている。

URL：<http://jems.ecis.nagoya-u.ac.jp/moodle/course/view.php?id=39>

1-1 オンライン読解問題

日本語教育メディア・システム開発部門では2004年に中上級学習者を対象としたオンライン読解・作文コースを構築、運営してきたが、よりやさしいレベルの問題を望む声に答えて、この度初中級向けオンライン読解練習コースA・B、2コースを作成した。各コース10問からなり、100字から300字程度の文章を読み、質問に四肢選択の形で答える形式で統一されている。

4 木々のみどり美しい季節となりましたが、みなさまおかわりなくおすごしのことと思います。このたび、12年間住みなれた名古屋より京都の郊外にこしてまいりました。近くにはまだ田舎も多く、毎日散歩をたのしんでいます。こちらにおいでの際は、ぜひお立ちください。

3 点 得点: 1/1 これはどんな手紙ですか。

1つの答えを選択してください。

- a. お礼の手紙
- b. 旅行先からの手紙
- c. ひっこしを知らせる手紙
- d. 招待状

送信

読解Aコース 問題例

4 島に住んでいる動物と大陸に住んでいる動物とでは、サイズの違いが見られる。典型的なのはゾウで、島に隔離されたゾウは、世代を重ねるうちに、どんどん小型化していった。鳥といふところは、大陸に比べ食べ物も少いし、そもそも面積も狭い。だから、動物の方もそれに合わせてミニサイズになっていくのは、なんとなくわかる気がするが、話はそう単純ではない。ネズミやウサギのようなサイズの小さいものを見ると、これらは逆に島では大きくなっていく。

(本川達雄「ゾウの時間ネズミの時間」中央公論社より)

2 点 得点: 1/1 次の文の中から合っているものを選びなさい。

1つの答えを選択してください。

- a. 島に動物を連れてくるとみな小さくなる
- b. 大陸には大きい動物がいる
- c. 島でも小型動物は食べ物が少ないため小さい
- d. 小型動物は大陸より島の方が大きい

送信

読解Bコース 問題例

1-2 オンライン漢字問題

徳弘康代(2011)『日本語学習のためのよく使う順漢字2100』三省堂の中から特に習得が難しい(1)対義語、(2)類義語、(3)同音異義語、(4)同訓異字、(5)類音の問題を選出し、各グループに適した問題形態を著者と相談し、問題を作成した。

(1) 対義語は全部で100の熟語を扱っており、読みの問題と対義語を選択する問題がある。

次の漢字の読みをひらがなでかきなさい

1 婉曲 えんきよく X

2 自立 じりつ ✓

3 演繹 えんごう X

(2) 類義語は約25問あり、類義語を選択する三択問題となっている。

下記の[]に入る言葉を選びなさい

Development

発展、発達、開発

1 幼児の脳機能発達 ✓ について研究する。

2 科学の発達 X は人類に幸福をもたらしたか。

3 新しい製品の開発 ✓ には時間がかかる。

(3) 同音異義語は同音異義語の簡単な説明のあと、記入問題が約120問ある。

アイショウ

愛称: 親愛の気持ちでつけた呼び名。

哀傷: 悲しみ心を痛める。

愛唱: 好んで歌うこと。

相性: 相手方との性格の合い方。

下記の[]に入る言葉を書きなさい

1 この同僚とは相性 ✓ がいい。

2 友達を愛称 ✓ で呼ぶ。

3 この歌はこの国の人に哀傷 X されている。

(4) 同訓異字も同訓異字の簡単な説明のあと、記入問題が約100問ある。

ぎわめる

窮める: 深くさぐって本質をつぎとめる。

極める: 最後まで到達する。行きつく。

究める: 最も深いところまで学び知る。

下記の[]に入る言葉を書きなさい

1 学問を究める ✓。

2 栄華を窮める X。

3 心理を極める X。

(5) 類音は類音の読み方を選択肢から選ぶ問題で約50問ある。

次の漢字の読みを□の中から選びなさい

ほぎ、ほうぎ、ほっき、ほんぎ

1 放棄 abandon ほうぎ ✓

2 補記 supplementing ほうぎ X

3 発起 proposition ほっき ✓

4 帚 broom ほうぎ ✓

5 本気 seriousness ほんぎ ✓

6 法規 regulations ほっき X

1-3 オンライン科学技術語彙問題

すでに moodle 上で公開されている科学技術語彙教材に含まれる語彙について、科学技術関連レポートでの使い方が学べる教材である。語彙の含まれた短いレポート例が、分野別に用意されている。すべて図やグラフを説明する文章になっており、文章中の空欄について最も適したものを選択する穴埋め問題になっている。

以下の文中の□について、科学技術関連レポート中で使用するのに最も適したものを選択してください。

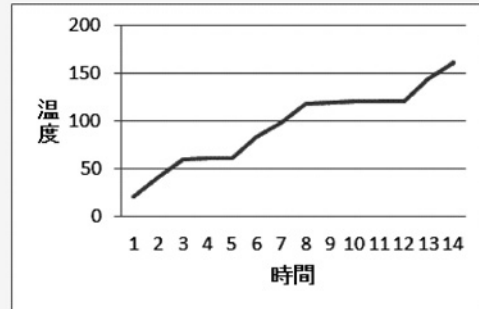
1

得点: 10

物質Aの温度上昇の特性を調べるために、実験を□。まず、固体の物質Aを用意し、一定の熱を□。その時の温度を□。

右のグラフはその結果を□。縦軸が温度の□、横軸が時間の□を示している。このグラフによると、測定□後3分までは温度が上昇し続け、その後5分までは□であった。5分以降は再び上昇し始め、8分の時点で上昇が止まった。その後はしばらく□であったが、12分の時点で再び上昇が始まった。

この結果から□物質Aの温度上昇の特性は以下の通りである。最初に上昇が止まった温度である60度付近が融点であり、次に上昇が止まった温度である120度付近が沸点である。



2. オンライン日本語コースの運営

今年度のオンラインコースの履修状況は以下の通りであった。

【オンライン読解・作文コース】

前期	登録者数：39	後期	登録者数：34
	受講者数：15		受講者数：20
	修了者数：3		修了者数：4

2013年度オンライン読解・作文コースの修了者数(14課中10課以上60%以上の成績)は前期3名、後期4名であった。

【オンライン漢字コース】

前期	登録者数：32	後期	登録者数：50
	受講者数：7		受講者数：15
	修了者数：4		修了者数：3

2013年度オンライン漢字コースの修了者数(10課中80%以上の成績)は前期4名、後期3名であった。

G30国際プログラム（学部）における日本語科目

国際教育交流本部

初鹿野阿れ・徳弘康代

1. 国際プログラム（学部）における日本語科目

G30国際プログラム（学部）は、2011年秋に始まり、2014年3月現在3学年が在籍している。2013年秋学期には1年生が49名入学し、そのうち32名が必修科目（「総合日本語・日本語セミナー（コミュニケーション）」）を履修した。日本語を続けて学習したい2・3年生のために随意科目として「アカデミック日本語」と「ビジネス日本語」が開講されている。「アカデミック日本語」と「ビジネス日本語」はG30国際プログラムだけでなく名古屋大学に所属する留学生・研究生等に対しても開講されている。本年度、国際プログラム（学部）において開講された科目とその主な使用教材は以下の通りである。

秋学期（2013年10月～2014年3月）：

- ・総合日本語 1a・1b
- ・日本語セミナー（コミュニケーション）1a・1b
 - 『日本語初級1大地』
 - 『日本語初級2大地』
 - 『Write Now! Kanji for Beginners』
- ・アカデミック日本語（文章理解・文章表現）1
 - 『大学・大学院留学生の日本語1読解編』
 - 『大学・大学院留学生の日本語2作文編』
- ・アカデミック日本語（文章理解・文章表現）3
 - 『大学・大学院留学生の日本語3論文読解編』
 - 『大学・大学院留学生の日本語4論文作成編』
- ・アカデミック日本語（聴解・口頭表現）1
 - 『中級日本語で挑戦！スピーチ&ディスカッション』
- ・アカデミック日本語（聴解・口頭表現）3
 - 『アカデミック・スキルを身につける聴解・発表ワークブック』
- ・ビジネス日本語 1
 - 『新装版ビジネスのための日本語』前半
- ・ビジネス日本語 3

『新装版商談のための日本語』前半

春学期（2013年4月～2013年9月）：

- ・総合日本語 2a・2b
- ・日本語セミナー（コミュニケーション）2a・2b
 - 『日本語初級2大地』
 - 『みんなの日本語中級I』
 - 『Write Now! Kanji for Beginners』
- ・アカデミック日本語（文章理解・文章表現）2
 - 秋学期と同じ教材の後半
- ・アカデミック日本語（文章理解・文章表現）4
 - 秋学期と同じ教材の後半
- ・アカデミック日本語（聴解・口頭表現）2
 - 『もっと中級日本語で挑戦！スピーチ&ディスカッション』
- ・アカデミック日本語（聴解・口頭表現）4
 - 『アカデミック・スキルを身につける聴解・発表ワークブック』
- ・ビジネス日本語 2
 - 『新装版ビジネスのための日本語』後半
- ・ビジネス日本語 4
 - 『新装版商談のための日本語』後半

2. G30学部生の日本語学習に関する諸問題

昨年まで問題とされていた、他の科目と試験が重なる、課題が多い等による学生の負担の多さに関する問題は、それぞれの科目での配慮と調整によって、新入生からの不満は減っている。日本語学習の必要性については、学生同士の情報もあるようで、日本語の必要性を自覚した学習意欲のある学生が増えている。2011年秋入学の学部生は2014年秋に最終学年を迎える。学生によって進路は様々で、進学、就職、また、日本にいるか、海外へ出るか、帰国するかなど学生がそれぞれ選択しなければならない時期が来ている。将来、日本企業への就職、あるいは日本と関係のある仕事をし

たいと考えている学生の日本語学習への意欲は高い。しかし、専門科目の忙しさで思うように日本語学習の時間が取れない学生も多い。このような、意欲は高いが忙しさで学習時間が取れない学生への指導をどのように行うことが可能かを考え実現していくことが今後の課題である。

3. その他の活動

今年度もG30プログラム（学部）の学生が公式行事で日本語のスピーチを行う機会を得たため、スピーチの事前指導を行った。

4月19日（金）には、豊田講堂に新しく設置されたグランドピアノの開鍵式が行われた。ピアノ・コンサートの前に、2名の学部生が名古屋での生活、大学での勉学や将来の夢についてスピーチを行った。ピアノの演奏を聞きに来た一般の方々にもG30の存在や学生達の様子等を知っていただくいい機会となった。

また、10月19日（土）に行われた名古屋大学ホームカミングデーにおいても、2名の学部生が自分の国の紹介や、将来についてスピーチをした。直前に国際交流貢献顕彰授与式が行われていたため、授与者の方々からも賞賛をいただき、交流の輪が広がった。

昨年度に引き続き、今年度も「名古屋大学基金感謝の集い」において、名古屋大学基金より奨学金を受けている2名の学部生がスピーチを行った。名古屋大基金に協力してくださっている方々にお礼を述べるとともに、将来の夢や名古屋大学での生活について5分ほどの話をした。昨年度の発表者も応援に駆けつけ、学生間のつながりが縦、横へと広がっていることが見て取れた。また、懇親会では、集まってくださった方達と交流、情報交換が行われ、学生達にとっても有意義な時間を過ごせたようである。

6人とも熱心に準備し、時間をかけて練習を行っていた。おおぜいの人の前で日本語で話すことによって自信をつけ、日本語学習に対する動機も高まったようである。また、様々な方々と交流する機会を得られたことも学生達にとって得難い経験となったであろう。来年度も学生が日本語でスピーチを行う機会があると思うが、学生達への負担も考慮しながら、学生達にメリットのあるかたちで続けていきたいと考えている。



「グランドピアノ開鍵式」



「第9回名古屋大学ホームカミングデー」



「平成25年度名古屋大学基金感謝の集い」

資 料

歴代センター長

平成25年度 国際言語センターの専任教員

平成25年度 日本語コースの担当者

平成25年度 授業担当および学位審査論文

平成25年度 国際言語センター教員研究業績

平成25年度 国際言語センター研究会記録

平成25年度 国際言語センター委員会名簿

国際言語センター沿革

国際言語センター在籍生名簿

歴代センター長

留学生センター

初代	馬越 徹	1993年4月～1995年3月
第二代	石田 眞	1995年4月～1999年3月
第三代	塚越 規弘	1999年4月～2001年3月
第四代	末松 良一	2001年4月～2005年3月
第五代	江崎 光男	2005年4月～2007年3月
第六代	石田 幸男	2007年4月～2011年3月
第七代	町田 健	2011年4月～2013年9月

国際言語センター

初代	福田 眞人	2013年10月～
----	-------	-----------

平成25年度 国際言語センターの専任教員

センター長 福田 眞人 (2013年10月～)

日本語・日本文化教育部門

教授	村上 京子
教授	鹿島 央
教授	初山 洋介
教授	浮葉 正親
教授	衣川 隆生
准教授	石崎 俊子
准教授	李 澤熊
講師	佐藤 弘毅
特任准教授	初鹿野阿れ
特任准教授	徳弘 康代

英語教育部門

特任教授	FISCHER Berthold (兼任)
特任教授	BUTKO Peter (兼任)
特任准教授	WOJDYLO John Andrew (兼任)
特任准教授	VASSILEVA Maria Nikolaeva (兼任)

平成25年度 日本語コースの担当者

1. 日本語研修 コース

〈4月期：第68期〉

鹿島 央	坪田 雅子
佐藤 弘毅	安井 澄江
魚住 友子	松木 玲子
大羽かおり	久野伊津子
高橋 伸子	

〈10月期：第69期〉

鹿島 央	坪田 雅子
佐藤 弘毅	安井 澄江
魚住 友子	松木 玲子
大羽かおり	久野伊津子
高橋 伸子	

2. 日本語・日本文化研修コース

〈2012年10月～2013年9月：第32期〉

初山 洋介	西田 瑞生
佐々木八寿子	向井 淑子
中川 康子	國澤 里美

3. 教養科目「留学生と日本 —異文化を通しての日本理解」

浮葉 正親	田所真生子
高木ひとみ	渡部 留美

4. 全学向け日本語コース

〈前期〉

李 澤熊	嶽 逸子
浮葉 正親	椿由 起子
石崎 俊子	坪田 雅子
村上 京子	西田 瑞生
鹿島 央	安井 澄江
初山 洋介	魚住 友子
佐藤 弘毅	大羽かおり
衣川 隆生	服部 淳
初鹿野阿れ	松木 玲子
徳弘 康代	加藤 恵梨
石川 公子	中川 康子
久野伊津子	向井 淑子
佐々木八寿子	加藤 淳
宗林 由佳	安井 朱美
高橋 伸子	金 敬黙
高安 葉子	

〈後期〉

李 澤熊	嶽 逸子
浮葉 正親	椿 由起子
石崎 俊子	坪田 雅子
村上 京子	西田 瑞生
鹿島 央	安井 澄江
初山 洋介	魚住 友子
佐藤 弘毅	大羽かおり
衣川 隆生	服部 淳
初鹿野阿れ	松木 玲子
徳弘 康代	加藤 恵梨
石川 公子	中川 康子
久野伊津子	向井 淑子
佐々木八寿子	加藤 淳
宗林 由佳	安井 朱美
高橋 伸子	金 敬黙
高安 葉子	

5. 学部留学生を対象とする言語文化科目
〈日本語〉

〈前期〉

浮葉 正親	鷺見 幸美
村上 京子	西田 瑞生
魚住 友子	國澤 里美

〈後期〉

浮葉 正親	鷺見 幸美
村上 京子	西田 瑞生
魚住 友子	國澤 里美

6. 日韓理工系学部留学生日本語プログラム

〈2013年10月～2014年 3月〉

村上 京子	入江 友里
李 澤熊	二口和紀子
石崎 俊子	関 ソラ
田中 典子	近藤 行人
李 賢珠	

7. G30国際プログラム（日本語科目）

初鹿野阿れ	加藤 淳
徳弘 康代	安井 朱美

平成25年度 授業担当および学位審査論文

I. 授業担当 (大学院・教養教育院・NUPACE)

1. 大学院

国際言語文化研究科

鹿島 央：日本語音声学 a (前期1コマ 2単位)

日本語音声学 b (後期1コマ 2単位)

榎山洋介：現代日本語学概論 a (前期1コマ 2単位)

現代日本語学概論 b (後期1コマ 2単位)

李 澤熊：日本語文法論 a (前期1コマ 2単位)

日本語文法論 b (後期1コマ 2単位)

村上京子：日本語教育評価論 a (前期1コマ 2単位)

日本語教育評価論 b (後期1コマ 2単位)

衣川隆生：日本語教育方法論概説 a

(前期1コマ 2単位)

日本語教育方法論概説 b

(後期1コマ 2単位)

石崎俊子：コンピューター支援日本語教育方法論 a

(前期1コマ 2単位)

コンピューター支援日本語教育方法論 b

(後期1コマ 2単位)

佐藤弘毅：日本語教育工学 a (前期1コマ 2単位)

日本語教育工学 b (前期1コマ 2単位)

浮葉正親：日韓比較文化論 a (前期1コマ 2単位)

日韓比較文化論 b (後期1コマ 2単位)

文学研究科

榎山洋介：理論言語学 a (前期1コマ 2単位)

理論言語学 b (後期1コマ 2単位)

2. 教養教育院

浮葉正親：基礎セミナー A

「韓流ドラマから『パッチギ』まで一日韓比較文化論のすすめ」(前期1コマ 2単位)

浮葉正親(代表)・高木ひとみ・田所真生子・渡部留美：

全学教養科目「留学生と日本－異文化を通しての日本理解」(後期1コマ 2単位)

佐藤弘毅：全学教養科目「情報リテラシー(文系)」

(前期1コマ 2単位)

村上京子：全学基礎科目「言語文化I日本語1」

(前期2コマ 3単位)

村上京子：全学基礎科目「言語文化I日本語2」

(後期2コマ 3単位)

浮葉正親：全学基礎科目「言語文化II日本語1」

(前期1コマ 2単位)

浮葉正親：全学基礎科目「言語文化II日本語2」

(後期1コマ 2単位)

3. 名古屋大学短期交換留学プログラム(NUPACE)

榎山洋介：入門講義「言語学1」

(後期1コマ 2単位)

榎山洋介：入門講義「言語学2」

(前期1コマ 2単位)

浮葉正親：入門講義「日本文化論1」

(後期1コマ 2単位)

浮葉正親：入門講義「日本文化論2」

(前期1コマ 2単位)

李 澤熊：入門講義「日本語学1」

(後期1コマ 2単位)

李 澤熊：入門講義「日本語学2」

(前期1コマ 2単位)

徳弘康代：入門講義「日本文学1」

(後期1コマ 2単位)

徳弘康代：入門講義「日本文学2」

(前期1コマ 2単位)

金 敬黙(非常勤講師)：入門講義「国際関係論1」

(後期1コマ 2単位)

金 敬黙(非常勤講師)：入門講義「国際関係論2」

(前期1コマ 2単位)

Ⅱ. 学位（博士）論文審査

○鹿島 央（主査）

論文提出者：稲田朋晃（国際言語文化研究科）

提出論文：韓国人日本語学習者による日本語アクセントの知覚と産出

○衣川隆生（主査）

論文提出者：封静宜（国際言語文化研究科）

提出論文：読みの目標が読解過程と理解に与える影響

○村上京子（主査）

論文提出者：入江友理（国際言語文化研究科）

提出論文：Can-do statementsを用いた自己評価における質問項目要因と個人差要因の影響－韓国・中国 JFL 学習者の「聞く」技能を対象として－

○鹿島 央（副査）

論文提出者：朴善嫻（国際言語文化研究科）

提出論文：二字漢字語のデータベースによる動詞化と形容詞化の日韓対象研究

○石崎俊子（副査）

論文提出者：入江友理（国際言語文化研究科）

提出論文：Can-do statementsを用いた自己評価における質問項目要因と個人差要因の影響－韓国・中国 JFL 学習者の「聞く」技能を対象として－

○初山洋介（副査）

論文提出者：呂芳（九州大学大学院比較社会文化学府）

提出論文：複合動詞「動詞連用形+かける」の研究

平成25年度 国際言語センター教員研究業績

(1) 石崎俊子

教材（オンライン教材）

漢字オンライン問題

<http://jems.ecis.nagoya-u.ac.jp/moodle/>

1. 対義語 <http://jems.ecis.nagoya-u.ac.jp/moodle/mod/quiz/view.php?id=3758>
2. 類義語 <http://jems.ecis.nagoya-u.ac.jp/moodle/mod/quiz/view.php?id=3759>
3. 同音異義語 <http://jems.ecis.nagoya-u.ac.jp/moodle/mod/quiz/view.php?id=3760>
4. 同訓異字 <http://jems.ecis.nagoya-u.ac.jp/moodle/mod/quiz/view.php?id=3761>
5. 類音 <http://jems.ecis.nagoya-u.ac.jp/moodle/mod/quiz/view.php?id=3762>

(2) 李 澤熊

論文

- 1) 2013年5月「韓国人日本語学習者のための日韓対照言語研究—「習慣」「癖」「病みつき」と「습관」「버릇」—」『韓日語文論集』第17輯, pp. 19-31, 韓日語日文学会（韓国）

口頭発表

- 1) 2013年6月「韓国人日本語学習者のための日韓対照言語研究—語彙分析を中心に—」, 現代日本語学研究会（第138回）, 於名古屋大学
- 2) 2013年8月「韓国人日本語学習者のための日韓対照言語研究—多義語分析を中心に—」, 現代日本語学研究会（第139回）, 於名古屋大学
- 3) 2013年9月「韓国人日本語学習者のための日韓対照言語研究—多義語分析を中心に—」日本認知言語学会第14回記念大会, 於京都外国語大学

その他

- 1) 2014年3月「来る」共同研究プロジェクト『述語構造の意味範疇の普遍性と多様性』, 国立国語研究所, <http://www.ninjal.ac.jp/research/project/a/jisei-sou/jisei-sou-detail/>

(3) 浮葉正親

論文

- 1) 浮葉正親(2014)「磯貝治良の中期作品における在日朝鮮人像の形成—少年時代の「朝鮮体験」を生き直す—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第21号, 名古屋大学国際言語センター, 71-86頁
- 2) 浮葉正親(2013)「在日文学研究とディアスポラ概念の可能性」『架橋』第32号, 在日朝鮮人作家を読む会, 51-61頁

講演

- 1) 浮葉正親(2014)「ソウルの村祭り—都市に息づく巫俗の伝統」第35回韓日歴史・文化フォーラム, 愛知韓国人会館, 2014年2月26日

(4) 鹿島 央

研究論文

- 1) 鹿島 央・橋本慎吾(2013)「CVCV構造をもつリズムユニットに関する音響的および生理的分析」『日本語・日本文化論集』第21号, pp. 45-69, 名古屋大学国際言語センター

(5) 衣川隆生

- 1) 衣川隆生(2014)「書く能力の評価」『日本語教育叢書「つくる」テストを作る（関正昭・平高史也（編））』スリーエーネットワーク, pp. 67-93
- 2) 衣川隆生(2013)「協働作業を通じた理解構築の過程の分析—ニュースの視聴から伝達へ—」『日本語教育方法研究会会誌』, Vol. 20, No. 2, pp. 76-77
- 3) 衣川隆生(2014)「文章の登場人物の感情や意図を学習者はどのように解釈しているか—キーワードに焦点を当てた協働作業を通して—」『日本語教育方法研究会会誌』, Vol. 21, No. 1, pp. 26-27
- 4) 近藤行人・田中典子・衣川隆生(2014)「作文へのシニアフィードバックを学習者はどう捉えたのか—学習者へのインタビューの質的分析から—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第21号, 名古屋大学国際言語センター, pp. 87-103

(6) 佐藤弘毅

①出版・刊行したもの

(カテゴリー) 論文

大学授業技法データベースの開発と授業改善への適用, *白鷗大学経営学部論集*, Vol. 28, No. 2 (印刷中) (2014) (赤堀侃司, 上岡文敏, 神戸文朗, 益田勇一, 柳沢昌義と共著)

②口頭発表したもの

(カテゴリー) 学会発表 (個人発表)

電子黒板のインタフェースの違いがノートテイキングに与える影響に関する分析, *教育システム情報学会研究報告*, Vol. 28, No. 5, pp. 43-48 (2014) (単著)

授業の感想をCMS・SNSに投稿・フィードバック・共有することの効果に関する分析, *教育システム情報学会研究報告*, Vol. 28, No. 7 (印刷中) (2014) (単著)

③獲得した外部資金・研究費

黒板の利点・成功事例・阻害要因に基づく電子化黒板の普及モデルと支援システムの開発, 文部科学省科学研究費補助金 (若手研究 (A)) (2010-2013)

大学の授業デザイン体系化とFD専門家養成に関する研究, 文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) (2011-2014) (研究代表者: 赤堀侃司 (白鷗大学))

(7) 徳弘康代

論文

1) 徳弘康代 (2013.10) 「漢字の汎用性および出現頻度調査」, 『2013年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, pp. 230-235, 日本語教育学会

2) 徳弘康代 (2014.3) 「言語の枠を超えた第二言語としての漢字教育の研究と連携 - II - 基礎資料としての漢字2,200字の汎用性調査」, 『JSL 漢字学習研究会誌』 6号, pp. 30-35. JSL 漢字学習研究会

3) 徳弘康代 (2014.3) 「漢字の汎用性調査および漢字同定のための国際基準設定の提案」, 『名古屋大学日本語・日本文化論集』 第21号, pp. 1-32, 名古屋大学国際言語センター

発表

1) 徳弘康代 (2013.9) 「汎用性に基づいた漢字の再評価」 第18回 AJE 日本語教育シンポジウム, 於 スペイン, マドリード・コンプルテンセ大学

2) 徳弘康代 (2013.10) 「漢字の汎用性および出現頻度調査」, 2013年度日本語教育学会秋季大会, 於 関西外国語大学

3) 徳弘康代 (2014.2) 「漢字の汎用性調査及び漢字同定のための国際基準設定の提案」, 「レキシコン・フェスタ」国立国語研究所 理論・構造研究系プロジェクト成果合同発表会, 於 国立国語研究所

その他

1) 徳弘康代 (2013.10) 第28回国民文化祭・やまなし 2013 文芸祭現代詩大会 審査・選評, 文化庁・山梨県・笛吹市, 於 山梨県笛吹市スコレーセンター

2) 国立国語研究所共同研究プロジェクト「文字環境のモデル化と社会言語科学への応用」共同研究員

(8) 初鹿野阿れ

著書・論文

1) 初鹿野阿れ・山崎けい子 (2013) 「3人会話における母語話者により始められた他者開始修復—母語話者が非母語話者に配慮を示すやり取りの再考—」『Proceedings of the 2013 annual conference of the Canadian Association for Japanese Language Education (CAJLE)』 CAJLE, pp. 71-81

発表

1) 初鹿野阿れ・山崎けい子 (2013) 「3人会話における母語話者により始められた他者開始修復—母語話者が非母語話者に配慮を示すやり取りの再考—」the 2013 annual conference of the Canadian Association for Japanese Language Education (CAJLE), 2013年8月24日, トロント大学

2) 岩田夏穂・初鹿野阿れ (2013) 「日本語教育に生かす会話分析の可能性—日常的なやりとりに注目して—」ワークショップ: 会話分析の知見を生かした会話教材の開発—, 話題提供2: 『にほんご会話上手!』の作成から—, 社会言語科学会2013年9月7日, 信州大学

3) 初鹿野阿れ・岩田夏穂 (2014) 「「からかい発話」の特徴と分類—からかいのターゲットと展開」国立国語研究所共同研究プロジェクト(領域指定)「日本語を母語あるいは第二言語とする者による相互行為に関する総合的研究」公開研究会, 2014年2月22日, 大阪大学

講演

- 1) 岩田夏穂・初鹿野阿れ (2013) 「会話分析的会話教育の活動のデザイン—相互行為に着目した教材作成のプロセスから—」お茶の水女子大学言語文化研究会, 2013年8月31日, お茶の水女子大学

(9) 榎山洋介

著書

- 1) 榎山洋介(2014)『教養のある日本語 教養のない日本語』, 技術評論社, 全190頁

編書

- 1) 山梨正明・吉村公宏・堀江薫・榎山洋介 [編] (2013)『認知歴史言語学』(認知日本語学講座 第7巻), くろしお出版
- 2) 山梨正明・吉村公宏・堀江薫・榎山洋介 [編] (2013)『認知音韻・形態論』(認知日本語学講座 第2巻), くろしお出版

その他

- 1) 青柳宏・石井透・榎山洋介 (2013) 「日本語文法学界の展望 展望2:理論的研究」, pp. 141-150, 『日本語文法』13-1, 日本語文法学会 [榎山:「認知言語学」担当]

研究発表

- 1) 榎山洋介 (2013) 「百科事典的意味における一般性が不完全な意味の重要性」(ワークショップ「百

科事典的意味観の射程」[代表:榎山洋介]), 『日本認知言語学会 第14回大会 CONFERENCE HANDBOOK』, pp. 23-26

- 2) 榎山洋介(2014)「ステレオタイプの意味論」, (現代日本語学研究会・第141回), 2014年2月15日, 於名古屋大学

- 3) 今井新悟, 榎山洋介, 砂川有里子, プラシヤント・パルデシ, 赤瀬川史朗「オンライン日本語基本動詞用法ハンドブックの作成—現状および将来の展望」[ポスター発表](NINJAL Typology Festa 2014) 2014年2月22日, 於国立国語研究所

- 4) 榎山洋介 (2014) 「百科事典的意味について:ステレオタイプを中心に」, 名古屋YWCA 日本語教育セミナー・30周年記念フォーラム「日本語教師をかたちづくるもの—言語・社会・歴史的観点から」, 2014年3月8日, 於名古屋YWCA

(10) 村上京子

著書

- 1) 関正昭・平高史也編 村上京子・加納千恵子・衣川隆生・小林典子・酒井たか子著『テストを作る』(2013) スリーエーネットワーク

発表

- 1) 村上京子「就労外国人のための日本語学習支援とレベル判定評価」第17回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム2013年9月5日 スペイン, マドリード, コンプルテンセ大学

平成25年度 国際言語センター研究会記録

教員による研究会

(1) 現代日本語学研究会

(関係教員：柁山洋介／李澤熊)

「現代日本語学研究会」は、柁山洋介を世話人として、1994年3月に始まったものである。また、2003年4月より、李澤熊が事務局を担当し、研究会の運営に尽力している。研究会は2014年3月現在で142回開催されている。参加者は毎回15～30人程度である。

本研究会は現代日本語を研究対象とし（日本語と他言語との対照研究を含む）、「意味論」「文法論」「語用論」等の分野で研究を行っている研究者（教員、大学院生等）の集まりである。ただし、参加者の研究の枠組みは多岐にわたり、理論志向の研究者も記述志向の研究者もいる。また、認知言語学を専攻する者も生成文法の研究者もいる。参加資格は、原則として、(近い将来)研究発表が可能な者とし、研究の水準は修士論文以上を目安としているが、学部レベルの参加者もいる。

2013年度に開催された研究会は以下の通りである。

第137回：2013年4月13日

発表者：有蘭智美（名古屋学院大学）

発表題目：英語学習におけるメトニミー表現の解釈

第138回：2013年6月22日

発表者：李 澤熊（名古屋大学）

発表題目：韓国人日本語学習者のための日韓対照言語研究－語彙分析を中心に－

第139回：2013年8月2日

統一テーマ：百科事典の意味観の射程

①発表者：柁山洋介（名古屋大学）

発表題目：百科事典の意味における一般性が不完全な意味の重要性

②発表者：野田 大志（東北学院大学）

発表題目：ある種の「人」を表す合成語の意味形成：百科事典の意味観に基づくアプローチ

③発表者：梶川克哉（名古屋SKY日本語学校）

発表題目：「逆接」と中心性

④発表者：李 澤熊（名古屋大学）

発表題目：韓国人日本語学習者のための日韓対照言語研究－多義語分析を中心に

第140回：2013年12月14日

発表者：渡邊真（名古屋大学大学院）

発表題目：現代日本語「はい」と「いいえ」の意味分析

第141回：2014年2月15日

発表者：柁山洋介（名古屋大学）

発表題目：ステレオタイプの意味論

第142回：2014年3月15日

発表者：山本幸一（愛知県立松平高等学校）

発表題目：転移修飾語の分析－修辭，そして日常言語使用の背後の概念体系として－

(2) 名古屋音声研究会 (関係教員：鹿島 央)

本研究会は、音声学を専攻する学生あるいは音声に興味を持っている学生がそれぞれの抱える問題を共有する場としてスタートしました。前期は4月から7月まで、後期は10月から1月まで、毎週金曜日の夕方5時から開催しています。以下は、2013（平成25）年度の発表者の名前とタイトルです。

2013年度（前期）

4月19日（金）

中国語話者日本語学習者を対象とした日本語アクセントの聴取研究

—修士段階の研究及びこれからの課題—（梁辰）

4月26日（金）

香港広東語を母語とする日本語学習者における促音の脱落・挿入・混同について—中国語北方方言話者との比較を通して—（久野百代）

5月10日（金）

日本語のサ行，ザ行，シャ行，ジャ行子音の音声的特徴—ジャワ語とスダ語を母語とするインドネシア人学習者を対象として—（ヘニ・ヘルナワティ）

5月17日(金)

韓国人日本語学習者の日本語歯茎摩擦音と後部歯茎摩擦音における音声的な長さコントロールについて—文字の読み上げと遅延反復手法(delayed repetition technique)による生成調査の比較—(チョ スヒョン)

5月24日(金)

歌唱が日本語学習者の語の記憶に及ぼす影響—て形のアクセントについて—(吉田千寿子)

5月31日(金)

中国語北方方言話者における日本語の母音無声化について(ス ディア)

6月7日(金)

中国人学習者の撥音語におけるアクセントの誤謬の初歩的研究—アクセント・パターン判定及び音響分析を中心とする—(許リン)

6月14日(金)

日中同義二字漢語アクセント習得における中国人学習者の母語干渉(柏 琳)

6月21日(金)

マラティー語母語話者の日本語スピーチにおける発音の特徴(寺田友子)

6月28日(金)

桂林地方の中国人日本語学習者におけるナ行子音とラ行子音の混同について—知覚と産出の両面から—(蔣媛)

7月5日(金)

小中連携:音声と文字を繋ぐ試み(黒川敦子)

7月12日(金)

ベトナム人学習者の日本語発音に対するの評価(サイ ティ マイ)

7月19日(金)

広東語学習者の特殊拍習得に関する音声学的研究(久野百代)

7月26日(金)

英語学習者が使用する発音ストラテジーの分析と分類(天野修一)

2013年度(後期)

10月18日(金)

「韓国人日本語学習者の日本語歯茎摩擦音と後部歯茎摩擦音における音声的な長さコントロールについて」(チョ スヒョン)

10月25日(金)

先行研究の収集と整理その2—韻律レベルにおける範疇知覚の検証実験—(梁辰)

11月1日(金)

モンゴル語話者における日本語母音の実験音声学的研究(ス ディア)

11月8日(金)

マラティー語母語話者の日本語音声上の特徴—破裂子音の有気音化と音環境の関係—(寺田友子)

11月15日(金)

桂林地方の中国人日本語学習者におけるナ行子音とラ行子音の混同について—産出の観点から—(蔣媛)

11月22日(金)

歌唱が日本語学習者の語の記憶に及ぼす影響—て形のアクセントについて—(吉田千寿子)

11月29日(金)

促音と長音の生成における混同要因について(久野百代)

12月6日(金)

中国人学習者の撥音語における基礎的研究—アクセント・パターン判定及び音響分析を中心とする—(許リン)

12月13日(金)

中国人日本語アクセントの生成における母語の影響(柏 琳)

12月20日(金)

「言語間の差異」に注目したフォニックス指導の試み:指導結果からの考察(黒川敦子)

2014年1月17日(金)

韓国語を母語とする日本語学習者の語彙と促音知覚(安田寛二)

1月24日(金)

日本語のサ行, ザ行, シャ行, ジャ行子音の音声的特徴—ジャワ語とスダ語を母語とするインドネシア人学習者を対象として—(ヘニ・ヘルナワティ)

平成25年度 国際言語センター委員会名簿

平成25年度 留学生センター全学委員会委員

委員会名	委員	任期	期間
センター協議会	センター長		職指定
研究・国際交流委員会（基幹第7）	センター長		職指定
国際交流推進本部会議委員	センター長		職指定
国際交流委員会	センター長 衣川 隆生 田中 京子 野水 勉 岩城 奈巳	2年 2年	職指定 (留学生センター)～平成26年3月31日 (留学生教育交流実施委員会委員長) (オブザーバ) (オブザーバ)
国際教育運営委員会	村上 京子 田中 京子 野水 勉 岩城 奈巳 初鹿野 阿れ 徳弘 康代		平成25年4月1日～平成27年3月31日 (留学生教育交流実施委員会委員長) (オブザーバ) (オブザーバ) (オブザーバ, 国際交流協力推進本部) (オブザーバ, 国際交流協力推進本部)
本部学生生活委員会	田中 京子		国際教育運営委員会委員
ハラスメント防止対策委員会	高木 ひとみ	2年	前任者の在任期間, 平成25年4月1日～平成26年3月31日
全学計画・評価担当者会議	鹿島 央		(留学生センター)
研究助成委員会	石崎 俊子	2年	平成24年4月1日～平成26年3月31日
交換留学実施委員会	センター長 田中 京子 岩城 奈巳 野水 勉 石川 クラウディア 衣川 隆生		職指定(委員長) (アドバイジング・カウンセリング部門) 〃 (短期留学部門) 〃 (その他)平成19年4月～
留学生教育交流実施委員会	田中 京子 高木 ひとみ 岩城 奈巳 野水 勉 石川 クラウディア		職指定(アドバイジング・カウンセリング部門の教授)(委員長) (アドバイジング・カウンセリング部門) 〃 (短期留学部門) 〃
全学教育企画委員会	村上 京子	2年	平成24年4月1日～平成26年3月31日
教養教育院統括部 言語文化科目部会	浮葉 正親	1年	平成25年4月1日～平成26年3月31日
附属図書館商議委員会(オブザーバー)	李 澤熊	2年	平成24年4月1日～平成26年3月31日
情報セキュリティ組織連絡協議会	佐藤 弘毅		
情報メディア教育センター言語教育専門委員会	石崎 俊子	2年	平成25年4月1日～平成27年3月31日
名古屋大学スペース・コラボレーション・システム事業委員会 全学教育棟子局運営委員会	佐藤 弘毅	1年	平成25年4月1日～平成26年3月31日
NICE 連絡会	石崎 俊子		平成17年4月1日～(任期なし)
国際学術コンソーシアム推進室会議	石崎 俊子 岩城 奈巳		平成24年4月1日～平成26年3月31日 ～平成25年4月30日, 平成25年5月1日～平成27年4月30日
災害対策室会議	衣川 隆生		平成25年4月1日～平成26年3月31日
全学同窓会幹事会	李 澤熊		平成25年4月1日～平成26年3月31日
一般廃棄物管理者	野水 勉		平成14年5月8日～
奨学金等採択均等計算ルール WG	野水 勉		国際交流委員会(年度更新)
学童保育所検討委員会	石川 クラウディア	2年	平成25年4月1日～平成27年3月31日
こすもす保育園運営協議会	田中 京子	2年	平成24年4月1日～平成26年3月31日
キャンパスマスタープラン WG	野水 勉		平成18年4月1日～
ハラスメント防止対策担当(相談員)	高木 ひとみ	2年	前任者の在任期間, 平成25年4月1日～平成26年3月31日
ハラスメント相談センター運営委員会	高木 ひとみ	2年	前任者の在任期間, 平成25年4月1日～平成26年3月31日
男女共同参画推進委員会	石川 クラウディア	2年	平成24年4月1日～平成26年3月31日
総合保健体育科学センター運営委員会	田中 京子	2年	平成25年4月1日～平成27年3月31日

(平成25年10月1日から国際教育交流センターおよび国際言語センターに改組)

平成25年度 留学生センター内委員会委員

委員会名	下位部会・WG	メンバー
総務委員会	将来計画 WG	センター長・野水・鹿島・村上・昀山・衣川・浮葉・田中・国際学生交流課長
	執行部会（連絡会議）	センター長・各部門代表・国際学生交流課長
	特昇 WG	衣川・岩城
財務・施設委員会	経理・整備 WG	野水・岩城・李・佐藤
	PC室管理運営 WG	佐藤・衣川・野水・石崎・鹿島・岩城・李
	安全・防災部会	衣川・鹿島・石崎
計画・評価委員会	自己評価 WG	浮葉・鹿島・田中・野水・昀山・佐藤
	教育活動評価 WG	村上・石崎・野水・岩城・衣川
	研究評価 WG	昀山・田中・岩城・李
	年次計画・報告 WG	鹿島・野水・田中・昀山
広報委員会	広報部会	浮葉・李・岩城・佐藤
	ホームページ部会	石崎・野水・石川・李・岩城・佐藤・国際学生交流課長
	紀要部会	石川・田所・衣川
	日本語・日本文化論集編集部会	昀山・浮葉
教務委員会	日本語・JEMS 部会（FD も含む）	
	部門メンバー	
	アドバイジング・カウンセリング部会	部門メンバー
	短期留学部会	部門メンバー
	地域連携部会	衣川・浮葉

（平成25年10月1日から国際教育交流センターおよび国際言語センターに改組）

国際言語センター沿革

	日本語・日本文化教育部門	日本語教育メディア・システム開発部門
1977	語学センターが非常勤講師による外国人留学生のための日本語教育を開始	
1978	専任講師着任, 「全学向け日本語講座」授業開始	
1979	語学センターと教養外国語系列が総合され, 総合言語センター発足 総合言語センターの1部門として「日本語学科」設置 「日本語研修コース」開講	
1981	「日本語・日本文化研修コース」開講	
1984	教養部在籍留学生対象一般教育外国語科目「日本語」開講	
1991	総合言語センターが言語文化部に改組。それに伴い一般教育外国語科目「日本語」は言語文化科目「日本語」として開講される	
1993. 4	学内共同教育研究施設として, 「留学生センター」設置 (「日本語・日本文化教育部門」・「指導相談部門」の2部門体制) 留学生センターとして, これまで通り「全学向け日本語講座」「日本語研修コース」「日本語・日本文化研修コース」言語文化科目「日本語」を開講	
1994. 4	留学生センター研修生規定が定められ, (1994.2), 研修生の受け入れ開始	
1996. 4	短期留学生対象日本語授業開始	
1998. 4	インターネットによる WebCMJ のオンライン開始	
1999. 4		「日本語教育メディア・システム開発部門」発足 (留学生センター4部門体制となる)
8		担当助教授着任 (ハリソン)
2000. 4		二人目の担当助教授着任 (大野)
2001. 3	留学生センター新棟完成	
2003. 3	教授1名退任 (藤原)	
4	講師1名採用 (李)	
2004. 2		助教授1名転任 (ハリソン)
3	助教授1名退任 (神田)	
4		WebCMJ 多言語版開発 オンライン読解・作文コース開始
11		助教授1名採用 (石崎)
2005. 3		助教授1名転任 (大野)

	日本語・日本文化教育部門	日本語教育メディア・システム開発部門
4	日本語プログラムの再編成 1) 全学日本語プログラム(集中コース, 標準コース, 漢字コース, 入門講義, オンライン日本語コース) 2) 特別日本語プログラム(初級日本語特別プログラム, 上級日本語特別プログラム, 学部留学生向け日本語授業, 日韓理工系学部留学生プログラム)	教授1名日本語・日本文化教育部門から配置換え(村上) オンライン漢字コース開始
5	留学生センターホームページ改訂	
6	講師1名採用(佐藤)	
2006. 3	教授1名転任(尾崎)	
4	助教授1名採用(衣川)	現代日本語コース中級聴解 CD-ROM 開発
5	教授1名昇任(昀山)	
10		現代日本語コース中級聴解 Web 開発
2007. 2		現代日本語コース中級聴解 Web 課金開始
6	准教授1名昇任(李)	
2008. 3		JEMS オンライン日本語教育ポータルサイト開発
2009. 11	特任准教授1名着任(初鹿野: 国際交流協推進本部)	
2010. 2	特任准教授1名着任(徳弘: 国際交流協推進本部)	
2011. 3		TNe とよた日本語 e ラーニング会話編(市役所, 病院, 学校) 完成 TNe とよた日本語 e ラーニング文字編(ひらがな, カタカナ, 履歴書) 完成
2012. 3		WebCMJ 多言語版完成(17言語) 「名古屋大学日本語コース中級 I & II」オンライン及びデジタル版の開発 TNe とよた日本語 e ラーニング会話編 5 カ国版完成 TNe とよた日本語 e ラーニング文字編 5 カ国版完成
2013. 4	教授2名昇任(浮葉, 衣川)	
10	国際交流協力推進本部改編に伴い, 留学生センター日本語・日本文化教育部門及び日本語教育メディア・システム開発部門は, 「国際言語センター」に改組(「日本語・日本文化教育部門」・「英語教育部門」の2部門体制)。	

国際言語センター在籍生名簿

第68期日本語研修生名簿 (2013.4～2013.9)

学籍番号	学生番号	国名	氏名	フリガナ
1266	911362001	ブータン	TSHEWANG Norbu	ツェワング ノルブ
1267	911362002	カンボジア	Va Dararith	ヴァ ダラリート
1268	911362003	カンボジア	CHHAY Vannpoly	チェイ ヴァンポリー
1269	911362004	スリランカ	ATTANAYAKE MUDIYANSELAGE Waruni Samanthika Attanayake Jayaratne	アタナヤケ ムディヤンセラゲ ワルニ サマンティカ アタナヤケ ジャヤラテネ
1270	911362005	タイ	KALAPONG Jessadakorn	カラポン ジェサダコーン
1271	911362006	フィリピン	DATOON Rodmyr	ダトゥーン ロドマイヤー
1272	911362007	フィリピン	SUARNABA Emee Grace Tabares	スアルナバ エミー グレース タバレス
1273	911362008	ミャンマー	Ye Kyaw Thu	イエ チョウ ツ
1274	911362009	モンゴル	TULGAA Enebish	トルガー エネビシ
1275	911362010	ラオス	SAYASITH Inthida	サヤシス インシダ
1276	911362011	エクアドル	BELTRAN ULLAURI Jessica Gabriela	ベルトラン ウリャウリ ジェシカ ガブリエラ
1277	911362012	ブラジル	NEPOMUCENO NARDI Diego	ネポムセノ ナルディ ディエゴ
1278	911362013	イタリア	ROTONDO Marcello	ロトンド マルセロ
1279	911362014	ウズベキスタン	RADJAPOV Husain	ラドジャポフ フセイン
1280	911362015	エストニア	KURISMAA Mart	クリスマー マルト
1281	911362016	ウガンダ	AYEBAZIBWE Derrick	アエバジブエ デリック
1282	911362017	セネガル	DIENE Seydina Mohamed	ディエン セイディナ モハメド
1283	911362018	ナイジェリア	IMADE Richard Eke	イマデ リチャード エイク
1284	911362019	ベナン	ABOUA Kouami Auxence Melardot	アブア クアミ オセンス メラルド
1285	911362020	モロッコ	WISSAR Brahim	ウィサル ブラヒム

第69期日本語研修生名簿 (2013.10～2014.3)

学籍番号	学生番号	国名	氏名	フリガナ
1286	911362021	アメリカ	FERDERER Rebecca Marie	ファダラー レベッカ マリー
1287	911362022	チリ	NAHMIA S Navarro Natalia Karina	ナミアス ナバロ ナタリア カリナ
1288	911362023	ブラジル	OLIVEIRA CABECA NEVES Rodrigo Fernando	オリヴェイラ カベサ ネヴェス ロドリゴ フェルナンド
1289	911362024	インドネシア	Istikumayati	イスティクマヤティ
1292	911362027	韓国	KIM Jeongmin	キム ジョンミン
1293	911362028	メキシコ	MORENO CAMARA Lidia Carolina	モレノ カマラ リディア カロライナ
1294	911362029	エジプト	Victor Malak Youkim Meseha Ibrahim	ヴィクター マラク ヨキム メセハ イブラヒム
1295	911362030	ガーナ	ASARE Jerry Kofi	アサレ ジェリー コフィ
1296	911362031	ガーナ	CRENTSIL Frederick	クレンシル フレドリック
1297	911362032	南スーダン	SURUR Robert Marko Lemi	サラル ロバート マルコ レミ
1298	911362033	中国	LIU Haiou	リウ ハイオウ
1299	911362034	韓国	KOO Jawook	ク ジャウク
1300	911362035	韓国	KIM Dongmin	キム ドンミン
1301	911362036	韓国	MOON Jinseok	ムン ジンソク
1302	911362037	韓国	PAIK Seungju	ペク スンジュ
1303	911362038	韓国	YANG Seungmin	ヤン スンミン
1304	911362039	韓国	YE Daehui	イエ デフイ
1305	911362040	韓国	OH Jun Seok	オ ジュン ソク

第32期日本語・日本文化研修生名簿 (2012.10~2013.9)

学籍番号	学生番号	国名	氏名	フリガナ
日文411	951262041	ブラジル	NUNES Danyella	ヌネス ダニエラ
日文412	951262042	オーストリア	AHNELT Julian	アーネルト ユリアン
日文413	951262043	ウクライナ	LEONTIEVA Olga	レオンティエワ オリガ
日文414	951262044	ベトナム	DUONG Thi Thuy Linh	ズオン ティ テウイー リン
日文415	951262045	インドネシア	Hasabil Afif	ハサビル アフィーフ
日文416	951262046	中国	ZHANG QiuZi	チョウ シュウシ
日文417	951262047	ウクライナ	LIVSHYTS Valeriia	リブシチ ヴァレリア
日文418	951262048	インドネシア	Abdillah Fikri	フィクリ アブディラー
日文419	951262049	ベトナム	CAOThu Ha	カオ トウ ハー
日文420	951262050	インド	Aneesah Nishaat	オニシャ ニシャト
日文421	951262051	モンゴル	BAYARBAT Nyamkhuu	バヤルバト ニヤムフー
日文422	951262052	インド	SINGHA Sudip	シンハ スディップ
日文423	951262053	インドネシア	Steven	ステイブン
日文424	951262054	ハンガリー	TAUER Szandra	タウエル・サンドラ
日文425	951262055	ウズベキスタン	SULTONOVA Khilola	スルトノヴァ ヒローラ
日文426	951262056	インド	TANDON Sargam	サルガム タンダン
日文427	951262057	韓国	KIM Min Ju	キム ミンジュ
日文428	951262058	ブラジル	SOUSA E SILVA Rafael Maury	ソウサ エ シルバ ラファエル マウリ
日文429	951262059	中国	HUANG Wei	ファン ウエイ

編集後記

昨年（2013年）10月、留学生センターが改組され、国際言語センターが発足した。国際言語文化研究科長の福田真人教授をセンター長（兼任）に迎え、旧・留学生センターの日本語・日本文化教育部門と日本語教育メディア・システム開発部門の教員8名にG30の日本語教育担当教員2名を加え、10名が国際言語センター日本語・日本文化教育部門のメンバーとなった。

本誌は、新組織である国際言語センターの初めての年報である。本センターには、留学生センター時代に創刊された『名古屋大学日本語・日本文化論集』があり、本年3月に第21号を刊行している。このように研究成果を発表する場は確保されたものの、教育活動を報告する場がなく、年報を創刊することになった。（なお、G30英語教育担当の教員4名が本センターの英語教育部門を兼任しているが、そちらの活動報告は本誌には掲載されていない。）

福田センター長の巻頭言にあるように、新しい組織となった以上、「新しい革袋に新しい葡萄酒を」注がなければならない。本センターの新たな取り組みが本誌に紹介されることを切に望む。

(MU)

名古屋大学国際教育交流本部 国際言語センター年報 第1号

2014年9月1日 印刷・発行

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

編集者 名古屋大学国際教育交流本部
国際言語センター

電話 〈052〉789-2198

FAX 789-5100

印刷所 株式会社 荒川印刷
名古屋市中区千代田2-16-38
電話 〈052〉262-1006

Nagoya University International Education & Exchange
International Language Center
Annual Report Vol. 1